10-484

2044/24

英國エドウヰン、サー、アーノルド氏
大日本東京　木村亮吉譯

亞細亞迦光

東京　木村發行

亞細亞迺光

目次

第一編　下天託胎出胎成育
第二編　結婚營宮
第三編　看老病死世悟非常
第四編　踰城登山學道
第五編　勤苦六年行如所應
第六編　菩提樹下大覺成道
第七編　王宮聚洛會父王
第八編　轉法輪及入涅槃

已上

亞細亞遍光

英人エドウヰン、サー、アーノルド著
大日本帝國東京　木村亮吉譯

第一編

託胎出胎及成長

「天上天下唯我獨尊たる救世主牟尼佛の世に出現悉達多太子と呼れ尊智慧全善悲として衆生の爲に涅槃の大法を示し玉ふ聖蹟下の如し」

「兜率天上の下て四禪天ありて絶へず此の世を主宰し至聖の靈魂は兜率天上にありて生のときを待つてと歴劫の久敢に至る其時牟尼佛は此天上にありて五衰の相を現し此の世に再ひ生することを示玉へり淨居天は此の相を見て言へり牟尼佛は今一切衆生を濟度せん爲め

に世に現るゝと釋尊答て然り我今世に現るゝは最終にして之により
て我と我か法を修するものゝ爲に生死を解脱することを得せしめん
故に我は今ヒマラヤの南方に當れる釋迦種の中に生れん其の處を治
むる王は公明にして其所に住める人民は信心深き者なりと
一夜「スドダナ」王の皇后王の傍にありて睡し時奇異の夢を見たり珠玉
の光明を放てる六光の星輝き六牙をもてる「カマヂユン」の如き白象あ
らわれ其の左右光耀燁々として照り渡り皇妃の右の脇より胎内に入
ると覺たり目覺て後此世にあらぬ詞なる吉祥身中に充滿して胸に溢
るゝことく光明四方を照し岩間に震ひ波靜りて畫の花開きそろひ
皇后の喜こひ普く徹して日光の幽林を隈なく照すりことく下も無間
の底までに達せり此時靜かに聲あり汝等起てよ望を屬せよ生死は解

脱せられたり牟尼佛は今世に現れたりと斯くて「リンボス」には和氣普
く滿ちて人々いろ〳〵として喜ひ薫風ろよ〳〵として海陸を吹けり
夜明て此事を占夢者に占しめたり占夢者の曰くこれは吉相なり壓は
日輪と緣あるものにて今皇后の孕み玉へる御子は聖くして智慧滿ち
衆生を濟度するの道を敎へ無明を覺し玉はん然からされは大國の王
となり玉はんと既に牟尼佛の誕生の時至れり摩耶皇后は正午頃庭園
を歩み枝葉生茂りて花いと美敷咲ける「ハルサ」樹の下に立ちし時今ま
て正直なる大木枝葉を垂れて拜伏すること恰も有情のごとく渾ての
もの皆太子の生れ玉ふことを知れり既に生れし時華花瑞相頓に地上
に生し臥床を設け沐浴にい清泉頓に湧出し少も皇后は苦痛を感する
ことなく安らかに太子を生めり太子も頗る健かにて三十二相を備へ

至尊の容貌あり王宮より迎の輿の來りしとき之を荷ひ護れる者は「スメル山」より來りし四天王にて東方の天軍は銀の甲冑をよろひ眞珠の楯を持ち南方の天軍は碧玉の楯を持ちたる騎馬武者にて西方の天軍は「ナガス」を從へたる騎馬武者なり北方い黃金にて鎧はれ金の楯を持ち黃馬に乘り「ヤカシャス」にかこまれ各々華美の裝をおし來れり然れども人々の目には少しも此等の者あることを知らさりし天軍も又人々に顯はにみえざらしめんため外衣を被りて通常警護のことく輿の四方を守護せりかくのことく牟尼佛の世に現れしを以て喜ひ普く天地に滿たり王は熟〻占夢者の占ひし事を聞き又種〻不思議なることあるを思ひ謀りて心大に怪めり斯て又瑞相天に現はれたり此れは「チツラバレター」とて數千歲の間に出るとき之に伴て出るの瑞祥の賜なり「チヤクラトナ」とて神聖の珠玉及ひ寶石及ひ「アスハラトナ」とて虛空を馳驅せる駿馬と「ハスチーラトナ」とて大王の爲めに白象と其他謀臣猛將及ひ「イストリラトナ」とて艶美の神女現はれて此の聖靈なる重子に臨めり

斯くて王は國中の士民に命して賑々敷此の日を祝はしめたり扨て人民は市街を掃除し清潔なる香油を灌き戸毎に灯提旗を懸けたる木を立て連ねて比劍者俳優手品師呪術者輕業師綱渡等種々興行を催し歌舞妓等は美麗の裝にて市街を謠ひはやしまゐり熊や鹿の皮を着たる假面舞者虎使ひ角力闘鷄者太鼓打ち鐘鼓等は此の日を一世の榮として最面白く喜ばしく種々の藝を演して觀衆を喜ばし王の命令を空しくせさらんことをつとめたり且つ遠方よりは遙々と太子の喜ば

しき誕生を祝わん爲めに多くの商人等は黄金の器に積たる甘松、寶石其他空色の「メイキッ」とて蜘蛛の巣を以て織れる其のた、みゝさ漸々通常の顔を覆計りのものと眞珠と白檀をこまかにおりつめたる胴服とを捧たり又都府村々より種々の献納ものを捧くる者多きを以て此の太子を榮の君とて「サバルタシッド」と名け署して悉達多と呼へり多くの謁見者の中に阿私多仙といへる一老人來れり其耳長くして地に垂れ神通自在にして能く天音を聞き眷て「ヒープユル」樹の下に在りて默祈せし時牟尼佛誕生の事に付て淨居天の謠ふを聞しことあり此の仙は學識智慧に富みて尊威人を驚かす許なり王の前に出てしとき王は恭しく禮をなし皇后は御子を仙人の脚下に置かんとせり仙人御子を見し時呼て言く皇后陛下よ皇子をかく爲し玉ふ勿れと八度塵を掃

ひて己れの身と地に置き言く嗚呼嬰兒果して然り其光明の四方に發し御足裏のしるし及ひ「サワスチカ」のうづ聖き三十二相及ひ八十二種の相好ゝ大聖人の記號にして實に至尊の牟尼佛あり應に法を說きて衆生を濟度し玉はん然れど余が齡既に老て尊き法義を聞く能ハすといへとも今御尊貌を見るの榮を得たり王よ今皇子の誕生は數千歷劫の久數を經て始めて生せし人間の枯木に花の開きし如く智慧の香薰普ねくかはり慈愛の花蜜滴りて宇宙に滿さん王統の根に天の蓮の實を生せしゝことし嗚呼幸あるかな喜ばしきかな然れと幸福未た全からす必す一時陛下この御子の爲めに劒の臟腑を刺すか如き憂痛を感し玉ふことあらん皇后陛下よ此度皇太子を産み玉ひし御功德は實に廣大にして諸天衆生の喜悅、懇情を表する所此の娑婆にて人間の苦痛

を受け玉ふこと實に恐れ多し然れは七日のうちに安〳〵と永遠歡樂の境に移り玉はんと果して其言の如く第七日目の夕暮に摩耶皇后はいと安穩に睡しか終に目さめ玉はすして「トラヤストリナシヤス」の天に行たり多くの釋梵は之を奉迎して尊み侍べれり皇子には「マハプラジャパチー」と名けたる養母を以て養育の勞を取らしめ乳を皇子の唇に授けたり其の乳を吸へる唇は成長の後ち世を慰むる語を出す門となれるなり既に皇子の八歳になりし時王は皇子のために博識高德の敎師を求めたり然るに王は常々占夢者の言其の他の前兆を心に留めて如何に牟尼佛の尊榮と艱危の來るならんと思ひ患たり王あるとき大臣を呼ひ集ひ詢りて言く汝いま博識大知の學士を知れるや朕か子の爲めに敎訓するものを求めんと欲すと其時各大臣同音に答へて「ビスワミツラ」といへる碩學あり彼は博識にして諸學諸藝に通し經典の藴奥を究めたる高德の君子なりと是に於て王は「ビスワーミツラ」を招きて太子の師と定めたり扨て其吉日にあたり太子い寶石をちりはめ飾りたる緣ある赤黑き朱丹樹の書き板と筆とを取りていと謙たる容子にて敎師の前に進み出たり敎師太子に靜かに語りて子よ今余か語る經典の語を書けよ是は「ガヤトリ」とて神通の者に非されは聞き得ざる左の數語を言へり

Om, tatsavitur varĵeyam
Bhargo devasya dhîmahi.
Dhiyo yo na prachodayát.

「アシヤラ」我れ書けりとてしとやかに答へそれのみならす猶多くの聖

語を書きつらねたり即ち「ナグリ、ダクシン、ニー、マンガル、パルシヤ、ヤバ、ナルチー、ウシ、ダーヲド、シキヤアニ、マナ、マヂアチヤ」是れなり其他山谷幽谿に穴居せる者又海濱に住める者、蛇を拜める者、火を拜める者土中に蟄居せる者及ひ土堤を作りて其中に住める者等の用ゆる種々の言語及ひ記號等を書き又敎師の授けたる聖句を諸種の國語にて讀めり「ピスワミツラ」言く讀書は之れにて充分なり扨て數理を授けん故に今余か言ふ所に從ひて一二三四より十百千億乃至洛刄の位まて數へよといへり玆に於て太子は一位十位百位より進んて洛刄の位まて靜に數へ終りて猶位を進め「コチ、ナヒユフト、ニナヒユット、カンバ、ビスカンバ、アバブ、アツタタ、より「クムヅ、グンデキヤカス、ウトパラス、に至り「プンダリキヤスより、バヂユマス、に至り猶數へて「ハスタギリー、の砂の數より微分に至り夜の星を數ふる「カタ」より太洋の水滴を數ふる「コチカタ」内周微纖點なる「グンガ」より「グンガ」の砂を數億兆倍せる「アンタ、カルバス」まて數へ猶語を續きて之より微分の大數の極を求め「アサンキヤ」に至る之は世界一万年餘の間落る雨の長さを示したるものにて是より「マハカルパス」に至る是を諸天の過去、未來を數る數なりと誠に然りと尊き太子よ殿下は凡て此等の事を知り玉へるを以て余の敎を受るに及す然れは長さを數へ玉へと「アシヤラ」希はく我ら數るを聞け即ち十パラマニユスハ一パラシユクシユマを爲し十パラシユクシユマハ一トラサレンを爲し七トラサレンスハ光泉に浮へる石の微細なる塵の長を爲す七微細塵の長さは蝨のひげの尖を爲し十蝨鬚の尖りは一「リキヤ」を爲せり

十「リキャ」は一「ユカ」ヲ爲し十ユカは燕麥の心の長さを爲すこれは此の細き此を七廻りしたる長さにて皆穀物「マング」、辛、大麥の粒等も之に同し此の十の聚りたるか指のつきめと爲り十二れつきめに聚りたるか掌の長さを爲し之より腕の長さ矢の長さ鎗の長さを爲し二十鎗の長さは呼吸空と名けたる量を爲すこれは人間か其間の空所に呼吸し得ることを云ふあり之れを四十合したるもの「グ「一ガウ」にして之を四十倍あしたるが一「ヤヂョナ」を爲すなり余今又一ヤヂョナの日輪の光の中に浮へる微細塵を數へんやとて直に一々洩すことなく數へたり扨て「ビスワハミッラ」は之を聞時驚愕賞歎一方あらす太子の前に拜伏し言く殿下は殿下の師の師となるへき者にて殿下實に「グル」なり尊き太子よ殿下の彼が教授のもとに來りしは殿下は學ふことなくして知り玉ふを顯さんかためなり殿下は實に禮讓を保てる者なりと斯くて太子は己れの學識蘊奥に誇らす遜讓して教師を敬せり言語柔和にして正確賢明に居動威ありて温容性質寛優崇毅なり馬術に長し馬を御する事妙を得て人の乘り得さる馬に乘り御し能はさる馬を御せり又遊中とはいへ常に思ひ量るの心深く走れる鹿は追事なく競馬に於て己れの馬の呼吸あへきする時は止めて勝を求めす友達の負け悲しめる時は之を慰め種々妄想の起る時は思ひ量り益々年の長するに從て觀念に強く恰も喬木の始めて生する時其の隻葉よりして其の枝葉繁茂し四邊を覆か如し又太子は少しも悲痛憂苦、其他涙の種ともなるへきことを聞知りしことも感せしことともなかりき然れとも太子一日物の憂ともあるへきことを感せり時しも春ののとかなる日白鳥の一群

「ヒマラヤ」の棲かに歸らんと宮園の上を鳴き渡り一羽の白鳥は先きに導きをなしかけりゑに太子のいとこなる「デハタッタ」は箭を弓に注きねらいわやまたすして導き爲せる一羽を地に落さしめたり赤き血は流れ出て〻白き翼を染めたり太子は之を見て直に其鳥を靜かに取上己か膝に上け踞て之をいたわり「プランティン」の卷れさるさきの葉の如き柔ある手の掌を以て鳥を撫てさすり左手を以て確とれさへ右手を以て傷口より箭の根を拔き取り密と木の葉をあて〻療養を蟲せり太子は矢の根の刺し時如何なる痛なるかを試みん爲めに己か手の腕を刺し試み其苦痛を知り白鳥の傷を見て涙を流せり其時一人走り來りて吾が王子白鳥を射て此の花園の中に落ゑ玉へり願くは其鳥を余に與へ玉はれと云へり太子答へて然らす此の鳥は生るを以て與てとあたわす若し之れか死せるなれは致方なしといへとも唯矢は翼を傷つけし而已にて生命にはさわりあし其時「デハタッタ」來りて强て之れを與へんてとを請ひて言く死せるにせよ生るにせよ之を射落せし者は我なり天にある者は誰のものとて所有なし唯之を取りしものゝものなれ今之を我にあたへよと太子は白鳥を懷き首を自分の頸にあていと大膽に答て否な余之を與ることあたわす凡て慈悲と愛情とを以て得たる者は幾百万の一とはいへ皆余かものなり我れは此の優恤の情を無情と有情とに說きて世に嫌はしき痛艱憂苦の滅せんことを欲す之れ唯人間にのみ限れるにあらす凡てのものに備れるなり若し汝今此の事を爭はんとあらは博識高德の人を撰んて之を判せしめんと其の時一僧何所ともなく出來り言く生命を助けし者は其のものを助

し者なれは其の物と得は當然なり凡て殺生を爲すものは物の破壞者なり之と助くる者を扶持する者なれは勿論此鳥は太子のものありと斯くて人々此の裁判を正當なるものとせり王此の事を聞て喜ひ比丘を崇めん爲めに求めたれとも何處にも見へ玉はて唯いと怪しけなる蛇其の邊に匍匐するのみ諸天は時々此の如き變形を現し世の煩惱を覺せり之れ牟尼の始めて爲せし功德の一なり然れともいまた人世の艱苦を充分には知り玉はさりけり一日王は太子を呼ひて言く來れ春の景色ののとかにして其の樂きいかはかりゝを見よ地は肥て豐なる收穫を與へ百卿樹木蒼々として花卉潤漫と開き野に働る農夫は喜て謠へり凡て此等汝の目に觸るゝ者は余か死後皆汝のものあれは之を以て豐に暮せよと語れり斯くて王は太子を伴ひて郊外に出たり見渡せは沃野遠く連りて高低起伏し幼き牡牛い鬪み鳴れる衡の下に力を入れて鋤を牽き肥たる土は鋤に從て耕され波打渚に粗似たり農夫は牛を追て深き畦に脛を埋め椰子樹茂りて其中より清流湧出て「バルサム」や「レモン」樹の間を注きて流れたり農夫は彼方此方に立ちて種子を蒔き叢や林の中には鳥の囀るあり蜂蜥蜴甲虫等の羽ふさの響けるありて皆春の日に樂めり種々の野禽小鳥は「マンゴー樹」の梢に囀れるあり蝶や蜂を食んと追かけるあり下には條に粟鼠の走れるあり白鷺は餌を求めて水牛の中に伍し鵞は高く舞て空に遊ひ孔雀は堂を廻りて低く飛ひ家鳩は幸福を祝して歩みなき遙かにきこゆるは婚姻太鼓の音にして大平安穩を祝せる聲洋ゝとして四方に溢たり太子之を見て大に喜ひ又顧みて熟々觀念し玉へりかくのてとく働ける生活の

中にも苦痛あることを覺れり今働ける農夫等は日々の生計を營まん爲めに汗し牡牛は炎天に追ひ使はれ蜥蜴は蟻を求めて食し蛇は蜥蜴小蟲を逐て食し鷲は蛇や蜥蜴を求て食し隼鷹は小鳥を攫み食ふ互に奪互にあさりて餌の餌となりて殺されし者は又ころすものゝ餌となり殺す者は又殺すものゝ餌となり優れるものゝ勝ち劣るものは餌となり互に食を爭ひ死を爭ふの狀小蟲、禽獸より人間界にも絶へざるを見たり熟々思ひ謀るに物の生活といへる者は此のごとく憂き艱難に腦める者なりやとて歎息しつゝ言く余の世に來りしは今此の世界の有樣を見んか爲めなり農夫の食物は汗に濕ひ牡牛ははけしく役せらる又森や藪には優勝劣敗の爭ひあり空の中何處に至るも遁るゝところなし水の中海の底に至るも匿るゝ處あし嗚呼是れ生活の狀況なり我

今之か爲めに觀察思惟せんとて傍に避け玉へり

斯くて太子は「ジアブ」樹の下に坐を占め膝を曲けて足を組み聖相を現して生活の苦惱を觀察し其の源因を求め之を救濟するの法を思惟せり如此太子は慈悲、恩愛の心、鴻大にして觀念の境に入りしとき心魂虛空に皈し妄想、煩惱、消滅したるかごとき狀情にて禪定の薀奥にいる初階なる「チヤナ」(禪)の地位に達せり此の時五の天神現して樹邊を廻り玉ひしか逡巡躊躇して言く如何なる至尊の能力我れと引とむるやと佛心の念力を感したりき其時諸天等太子の頭の周圍より光明赫輝として輝き發せるを見たり之れと同時に森林の中より聲あり「リシ」彼は此の世の衆生を濟度せんか爲めに來る至尊至聖の佛なり各々降りて彼を拜せよと因て諸天等降り拜し讃美の歌を唄て究竟天の天神の許に

此事を知らせん爲めに昇天し玉へり

時に王は太子を求めて太子の猶樹下に在り坐禪觀法に餘念おきを見たり日は既に正午を過ぎて西山に入らんとす樹蔭長く「ジャムブ樹」の枝左右に茂りて太子の頭を覆へり此の時太子を見しもの杏李花の中より聲あるを聞けり聞く太子の曇りの胸の晴されは余か曇は迚も晴るゝてとなしと

第二篇　結婚營宮

既に太子は十八歳にあり玉へり時に「スドダナ」大王は太子の爲めに三棟の宏壯なる宮殿を作らしめたり一は冬暖なる爲め四角に截たゝめる香柏樹の裏木を以て作られまた一棟は紋大理石にて夏の爲めに涼しく又た一棟は煉瓦を用ひ春秋の季候に適せり之れをスドバー、スランマー、クンマーと名けたり斯くて此の庭園の花時には其の美麗なるまと一層にて凡ての花は爛熳と開きわたり清き流れは涓々としてすみ小林の間を注き種々の奇木蒼木鬱々と蔽ひ繁り見るも樂しき景色なり太子い此内にありて種々の歡樂にひさゝかも飽くことなく實に人間界にもかゝる所ありやと思はしめたり此時太子ははや壯年においせども常に觀法の心深恰もすみ渡りたる水面に叢雲の遮きりわた

る思あらしめたり大王は之を見て大ひに愛ひあまたの大臣を呼びつゝへ汝等は占夢者の彼れに就き告げたることを如何に思ふや朕彼を愛することゝ己れの身を愛する如く彼をして宇宙の王國を支配し多くの敵を打滅し諸王の王とならしめんことゝころ朕が望みなり然るに彼れ宮殿の中にありながら常に痛苦を嘗め人生の凶惡を撓め眞理善道を得るに己れの身を犧牲にせんとするの望み絶へず朕之れを愛ふることゝ甚し汝等朕が爲めに妙案を出し彼れの望を翻し彼れに余が王國を支配せしむる樣に謀れと一の大臣荅ふる樣は陛下皇太子の如此鬱氣を散せしむるは愛戀の情よりよきは無し太子は未だ婦女の如何を知り玉はざれば一度太子に美女を進めん之れをして愛戀の情綢繆ならしめ太子の心思を織しめば尊慮如何に金鉄の如きも之を破ることゝ必せり恰も婦女の鬢髮を以て繫たる情は黃銅の鎖より强し然れば太子に多くの美女を進め歡樂に耽らしむること第一の良策なりと衆大臣皆此れを然りとす大王の玉はく假令我れ彼の爲めに美女を求むるとも愛戀の情こそ人各好む所あり朕如何に美人なりと思ふとも若し彼れに適せざれば止まん然れば多くの美女の花園を造り思のまゝに其の最と美敗きと思ふ花を手折しめん事こそ妙計ならん大臣荅へて美女の花園を思の儘に逍遙せしめ其好みを撰ばしめん美女には容顏各々好みあり大王此事と行はんに祝祭に託し王國の處女を集め「シヤカヤ」の樂戲を設け優者には太子をして手つから褒賞を授けしめん其時如何に太子とはいへ艶麗なる美女の其前に出ると見る時は思念の動くことゝ疑ふべからず此を察し其望みに任せん戀ひ慕ふ心は自然に

戀の眼にあれバ太子をして人間の福祉に導うんこと必せりと扨て此の計策を行はんか爲め日を定め一日大王は布告を出し總て國内に在る美女等は王の宮殿に集り戯樂の會に來れ太子は優者にも何れの者にも相應の褒賞を與へんと觸れ示せり是に於て「カラピバツワ」の處女は日を期して美麗の裝飾を爲し純黑としたる鬢髮を櫛り香粉馥郁として華麗なる肩巾を纏ひ艶麗手足は種々粉彩を施し王宮の前を寛々と見上るも耻敢くやありけん皆眼を地に注き歩み來れり多くの若き美女は太子を見奉りて胸うつ動氣は恐惶の心よりも耻しさ戀しさに眩されて上をも見あげずして太子より手づからの賜を受奉りたり然れども太子は容色自若として擧動すてしも變らず無心無情の有樣なり大臣等は左右にありて美女の來るごとに是れはと太子の意に適ふあらんと褒めそやせども少しも感ずる事なく却て處女は倍々耻滿面紅を含み慄へる手の賜の手に觸れて忙敢く其場を立去れり如此にして順次に美女の群集も其美を競ひ終りて既に褒賞の賜も盡きたりしとき最後に來りたる者はヤツダハラと呼はれたる年若き處女にして容姿の艶麗なる婉娩衆に勝れ梵天界の美人の如く「パルバチ」の如く睠愛情を含み其狀牡鹿の夫を求むるに似て其有樣筆に畫き盡されぬ計なり太子は此女の近つくを見て座を立ち玉ひしか多くの侍臣は是れこそと思ひて見つめたり處女少しも恐懼の心なく手を胸にあて閑に太子に向ひ妾にも下さるべき褒賞ありやと尋ねたり太子答て既に賜を與へ盡したれども猶汝に與ゆる物は此處にありとて頸に絡ひ玉へる玉の頸飾をとり「ヤツダハラ」の腦に結びたり是に於て多くの侍臣は

愛戀の情てろ唯「ヤッダハラ」に在る事を知れり此の盛事終りて後太子自ら思惟して何故吾か心「ヤッダハラ」を見しとき愛戀煩腦の燃しやを悟れり即ち我と「ヤッダハラ」とは久遠の契り淺からず一日狩人の子「ヤムン」の川流に近く山里の童女と戯れ松樹の下に競ひ遊びしとき「ナンダデビー」を審判とし此の小供の中に花の冠を被れる者あり雉子野雞の毛を以て飾りたるあり又一は松果を以て飾りたる者あり扨て其の遲れ走りし者最初此子の前に來る此子は此の童女に馴れたる鹿子を與へ互に緣を結び生涯相離るゝ事なく此處に住しことあり之れ此因緣の聚結輪轉して來るものにして蒔れたる種子の生する如く善惡、苦樂、憎愛、應報を生する恰も果を結ぶか如し我とヤッダハラとは全く此の理に據りて來れる者にして生死因緣の輪轉今此處に轉じ來れるなりと斯くて侍臣等は凡て見聞せし處の太子の虛心平氣なりし事より「スプラブッーダー」の子「ヤッダハラ」を見し時居動の變り自分の珠玉の飾りを與へ玉ひし事等一伍一什を大王に奏聞せり茲に大王莞爾として我等既に此子を誘惑するの餌と求めたり然れば空中の隼鷹を捕ること易し速に使を彼女の家に送り我子の爲めに婚姻を求めしめしむ抑々此釋種の習俗にて貴人の其婚を求むるに當りて種々の武藝を競ひ優者あらざる時は婚姻の約をそ結バさるあり此法式は國王の嗣子と雖も決して破ること能はす然れば此美女の父大王の使に答へて既に我女は太子の爲め久遠の以前より因緣を結バれたる者なれば王の命を奉せんと最易し太子御遁世の望高き御心にて弓箭劍擊乘馬あとの術を競はれ玉ふ事如何にも心もとなし如何ゝ心得侍らんやと答へた

り王之を聞きて大に憂ひ謂らく之れを以て太子の爲めに婚を「ヤンダハラ」に求むること難からん弓箭の術に於ては「デバダッター」に勝る者なし馬術に於ては「アルジュナー」に勝る者なし又劍術に於ては「ナンダー」に勝る者なしと太子之を聞き微笑して言ふ如此事はいと易し吾は既に總て是等の事を學び得たり疾く布告を出し日を期して余と武藝を競はんとする者を招き玉へ余が愛戀の情は決して彼等の爲に破るゝ者にあらずと因て第七日目を期して太子は「ヤンダハラ」の冠を得ん爲めに己れと武藝を較べんとする者を呼び集めたり

第七日目に至りて釋種の姓の酋領たる者ゝ此處女の家に集りたり茲に於て處女は新婦となれる故に美麗に飾りたる輿に乘り花冠をかむりたる牛ゝ之を牽き左右音樂の聲と共に親戚の者に伴はれ出で行けり當日武藝を較べんとて出で來る者は王族にてデバダッタと名くる者及びナンダー、アルジュナと名けたる二人あり偖て太子はカンダカと名けたる駿馬に打乘り大勢の中に出て來れり馬は衆人を見て嘶き太子ゝ王國の群臣諸族の集れるを見喜悅限りなかりき然ども太子は艶敷ヤンダハラを見しとき心大に喜ひ手綱をひきて馬を止め地に降り呼で曰く誰れか余が得んとする珠玉を他に望まんとする者あるや我が望は決して空しき望にあらす誰れか我と技を角する者あらんやと此時ナンダは弓箭の術を以て太子と技柄を較べんとて出て黃銅の太鼓を六刼のさきに置き又アルジュナは六刼デバダッターは八刼の遠きに置き各〻其技を盡せり太子は命じて其的の小錢の形に見ゆる程十刼の遠きに置かしめたり然れどナンダ、アルジュナも之れを射通しデ

バダッターは的の兩傍を射通せり多くの觀者は之を見て大ひに驚き喝采の聲一時は鳴も止まざりし戀ひ慕ひたるヤソダハラは驚怖の餘り錦銹を以て面を蓋ひ太子の箭は如何成り行くかを見ざらしめんと案じたり太子は蒔繪にていと奇麗に飾られたる强弓を取り充分に引き放てば少しも過たず弦は烈しく返へりて弓身を彈き破れり太子笑を含みて此技を爲すは唯一の遊樂の如き者にして愛戀の爲に非ず誰れか釋種に於て猶强き弓をもてるものありやと呼べり其時一人出でゝ曰く「シンハハニユウ」の弓と名けたるもの彼寺院に幾世ともなく知れさる時代より寶物とせり昔より一人として之れを引きし者なしと太子答へて之を持ち來らしむ其弓は鋼鐵を以て鍛へ立てたるものにして黄金の線にて彎形の上下をまき實に稀有の古物强弓ところ見へたり太子は二度も之れを膝に當て撓め試みし後語りて余の從兄此弓を試みよと然れども一人として此れを取り撓め引く者なかりき太子はしばらくして弓を引き弦を皷することゝ屢〻其響驚の空をかすめ飛ぶが如く其音遠く聞へて土民は驚き傳へ此の響は何なるやをしらす或人答へてこれ「シンハハコユウ」の弓の音にして太子の御手づから引き玉ふものなりと言ひしとかや太子は是れに矢を注ぎ放ちしとき其音すさまじく空氣をきりて烈く飛び遙か先きなる二重の的を射通し其矢遠く飛び去りて行衛さらにしれざりけり次は劒擊の較べにしてデバダッターは六指アルジユナは七指ナンダは九指の太さなる多羅樹を截り斷ちたり太子は此樹の併び立たる二ッの幹を唯一擊に利く打きりたり然れと其切口餘りするどきを以て樹はきられなゝらにし

て倒れずナンダ之れを見て太子のきつ先はろれたりと言へりヤッダハラ此れを聞きて消入る計りに恐れ憂ひけるゞ淨居天の守りや強かりけん南風颯と吹き來りて見る間に樹は根を離れて音すさまじく倒れたり扨て次は馬術の競にして數頭の駿馬勢ひ強く張きりて美女の周圍を三度をかすめ走れり然れゞ白き「カンダカ」は遙か後に有りながら唯唾はく間に二十矢の長を走りこせり「ナンダ」呼て曰く我れ若し如此名馬を得たらんには勝を求めんこと必定なりと玆に於て馬丁は純黑なる一頭の名馬を牽き出せり此馬や其眼鋭く鼻孔吃として廣く鬣きつたちて未だ鞍を置きし事あき駿馬にて猛威靖に四邊を驚かせり釋迦種の少壯は三度其脊に跨りたれゞはね飛ばされ唯砂と耻とを蒙るのみアルツユナーは少しく妙を得たりけん馬脊に跨り其鎖りを解かしめ手綱をしつかと採り馬のわきを打ちしとき一時怒り狂ひたる馬もそのときばかり馴れし如く見へ唯一しざりの後頓に荒れ出し狂ひたけること唯ならず今やアルジユナーは蹴殺され嚙み裂れんとする有様なりしを漸く馬丁等の盡力によりて助けられたり其時群集の人〻呼て太子よ其馬に乘ることゝ勿れ其馬の肝は嵐の如く血は炎の如く燃へりと太子は命じて鎖を解き我れに其鬣を持たしめよとて靜かに之をとり何か數言を稱へし後右手を以て馬の目に置き其顏と頸との周圍を撫でさすり之れにまたがりしとき今迄荒たけりたる鋭氣も全く挫けて其從順なること佛威を知るか如く唯手綱に從て驅け廻れり人〻驚きて何人と雖も太子と競ふこと勿れ彼れは最も優れるものなりと賞讃止まざりけり扨て凡て求婚者は皆呼びて太子に優るもの

なしと又處女の父スプラブッダー言く我は御身の優者となり玉ふこと余か願望にして御身に思ひ焦るゝと唯ならず如何にして深宮にをいしあから武藝に優り玉ふこと如何なる妖術の敢へ候ひしや太子よ今御身が得玉ひし此寶を取り玉へと今迄待ちかまへたる窈窕たるインヂヤンの處女ヤツダハラは座を立ち大勢の中を分け出でゝ「モグラ」の花の冠を取り金すゞ入りたる黒の覆面をかゝげ揚々と太子の前に歩み出たり太子は今駿馬より降り玉ひしときにして馬はをとなしく首を太子の腕の下に垂れうゞめりヤツダハラは太子の前に跪き面かげをとりたり其容顔の美くしきと眩き計りにて愛情勃ゝとして其喜しさ如何んとも語り難き程なり扨て香氣粉ゝたる花環をとり太子の頸に置きしか、確と太子に懐き付き首を太子の胸によせかけて親愛なる太子よ妾は今御身がものとなれりと言ひしや群集歡呼止まさりけりヤツダハラハ餘り耻しさ喜しさに心とゞろき左右の手を合せ再び面を覆ひたり其の後釋尊の大覺せしとき熟ゝと往事を追懐しヤツダハラのかむりし金線と黒色の面覆ひ又其ときの擧動を觀察して自ら悟り玉へり謂へらく我れ未だ知らざりけり生死輪廻のありさまは舊事を追懐せしむる事あり吾れ記憶すらく歴劫の昔し虎の身となりヒマラヤの高原に漂歴し餓へ疲れたる虎と共に叢草の間に伏し遠く獸群の草かうて既に虎の餌とあらん爲め死の道に近ずけれると見たり偖て夜に入りて人類又は麋鹿の跡をかきつゝ葦蘆草莽の間を歩みしとき林中の美妙とも呼ばるゝ許りなる牝虎に出遇ひたり其時我と共に有りし牡虎互に牝虎を爭ひて鬪ひたり其牝虎の皮は頗る美麗なる

ものにて其斑紋金地に黒の縫箔をしたるばりにてさながら先にヤ
ソダハラの冠りし面かけの如し偖て爭鬪は益々激しく齒牙相接し互
に雌雄を決せしが牝虎は傍らに在りて互ひの勝負を守りたり我は頃
て勝者となりしとき牝虎は進み來りて喜ばしく我がはぎを甞めさも
喜しげに勇々と我と共に草莽の中に入りしことありかく生死の回轉
する高き者にも下き者にもこのしるしありと此處女ヤソダハラは太
子の得る處となりたり即ち太子の好んで得たる分捕の如し偖て此婚
儀を祝せんか爲め吉辰を撰び釋迦種の習はしに從ひ天神「レッドラム」
なる「メシヤ」を饗せり當日にハ黄金の器具を飾り立て美麗き毛氈をし
きつめ婚儀に用ゆる花環をかけ連ね腕ひもを結び連ね美菓をさき米
や香油を灌き二個の麟片は赤き乳酪に浮されたり此麟の互ひに附着

しは愛情の生涯絶へさる兆なり凡ろ儀式通り飾られたる後燒火の周
圍を七歩して三度廻り種々の供養布施を故に聖人其他人々に與へ「寺
院に供物を捧げ讃歌をうたひ新夫婦の衣裳を結び和氣洋々として盛
宴を祝せり其時新婦の父なる老夫は左の祝言を呈せり尊き太子よ今
迄余が娘たりし者今君のものとなれり何時迄も彼れを愛し玉へ彼れ
の生命は君が者なればなりとかくてヤソダーラは太子に手をひかれ
音樂唱歌の聲に導かれ目出度王宮に歸り玉へり

スドダナ大王は愛戀の情のみを以て太子を滿足せしむるとを欲せず
宏大美麗の宮殿を建ることを命せり其宮殿を「ピシユランバン」と名
け其結構壯觀の美世に類なき程あり庭園の中央には丘陵起伏して緑
樹鬱蒼「ヒマラヤ」山より湧き出たる「ロヒニー」河は其麓を灌ぎ流れて終

にグンカの波となる又園庭の南方には多麻林度樹及び「サール」の樹をひ茂り青き「ガンチー」の花は總〳〵と開き茂り其清雅にして靜閑なること時々風のもようにより市街より蜂のうなるが如き聲のかすかに聞ゆることあるのみなり北方には「ヒマラヤ」の山脈高く幾へて國境を限り白き顛は青々としたる雲間をかすめ突兀として遠く重り青樹白峯嵯峨として入り亂れ奇峯怪崖相重疊て天に梯子をかくるが如し其下に茂林鬱蒼として廣がり瀑布は所々にかゝり靄霞遠くたなびきて松柏の深林には雉鳴豹聲遠く谷間に響き渡りて幽邃たり平原は山麓を擁して曠漠綠氈をしけるが如く宮殿の前面には飛閣空にかゝり花卉爛熳として其中に開き亂れ高塔は閣の左右を擁し圓柱四方をさへ其欄干には古代「ラーマー」及び「シタ」、「ハヌマン」、「ドロナパザー」の林神の娘子の故事どもを彫刻し前廊の中心には富德智慧の神なる「ガネシャ」の手に投環と鉤を侍ち身には花環をまとひたる立像あり扨て花園の小路をめぐりめぐりて內部の門に達す其門は白赤の班紋ある大理石を以て作り門楣は青色の大理石にして階級は蠟石戸は白檀樹にて種々の彫刻をなせり是れより內に入れば宏壯美麗の室相連りそれを導く階廊には方眼格子をはめ圓柱左右を擁し清流所々に湧出し蓮や「チルレボ」生々と蕃殖し青赤白の金魚は水中に遊泳し羚羊は日あたりのよき室にありて嫩芽を嚙ひ虹色の鳥は椰子樹の中を飛びまわり鳩い圓柱の桁に巣を組み敗石の外には美麗の孔雀揚々として歩み蒼鷺や鳥は其羣の中にあり青き鶏鶏は樹果の間を飛廻り黃き小鳥も美の花間に囀り憶病なる蜥蜴は方眼格子の間に恐るゝ處なく偃蹇し栗

鼠は人の手より餌を求め諸鳥諸獸は安堵して和氣瑞兆を呈せり徳兆の黒蛇は月花の下に睡り麝鹿は其間にさまよい猿猴は鴉と共に戯れ家内には窈窕艶美なる侍女、侍臣等互ひに喜びに満ち見る處莞爾として笑を含み温言相接せさる處なし互ひに喜ばんとして喜び互ひに樂まんとして樂み柔順なるを以て高慢としヤソダッラの喜び樂めること恰も清流の美花の内を沿ひ流るか如く常に福祉の變ること無き思ひあらしめたり

此數白の室の奥には華美精巧を盡したる深閨ありて其結搆玲瓏精神をして恍惚醉へるが如くならしむ入口には方眼の格子をはめ純白の大理石を以て作りたる水だめを置き階段其他左右の敷石は盡く瑪瑙石を以てし暑中と雖とも涼冷恰も雪中を歩むが如き感わらしむ日暮には日光かすかに遊廊壁龕に映し清雅なること無上思を起さしむ既に夜に至れは燈光窓幃に映して深閨を照し其光は玲瓏的歴として眞珠の光りを發するが如く輝きたる幕より星光を望むゝ如し幔幕の内には錦綉綾羅の臥床を設け四方には「プルター」の房を以て飾り最愛の情なき者には此中に伏すると能はさるか如き望わらしむ其光景恰も夜ありて晝なきが如く晝ありて夜なきが如き感あり微妙ある光融和として輝き香氣芬勃として室内に滿てり琵琶の聲は常にたゆることと無く美味膏粱の珍膳を備へ美果露のしたゝるか如く「シラベット」はヒマテヤの雪を以て冷し乳酪は象牙の杯に積れり左右には嬌艶ある侍女の周旋至らざるなし太子の既に目さむるときは管弦音樂の聲たゆることなく種々の香料薫物は芬々として青烟香氣を放ち太子をして精

神恍惚とし艶麗ヤツダハラに醉むはしるが如く浮世の有様を知らざらしむ

猶王は命令を下して一切の宮殿内に於て死或は年老ること其他病苦、艱難、憂ひ、等の凶事を語ること無からしめ若し之れを語る者あるときは王宮の樂園より追放せしめたり故に監察者は目を注き王宮外にある葬送の事其他哀みの種ともなるべき浮世の有様を語る者あるときは罰せんと注意せり又舞女の捲髪に於て一すじといへども白髪の亂るゝことおからしめ絶へず枯れ凋たる花や葉を拔き去りて少しも凶事の目に觸るゝこと勿らしめたり王は熟〳〵といへらく朕如此太子の少壯の間凡て世の艱難、凶事、を見せしむること無く又之れを思ひ煩るの餘裕なく逸遊歡樂に年月を送らしめ朕の後嗣の位に昇る頃は良王となり榮光に充ちて諸王の王とならんこと必せりと如此にして父王は此樂しき牢屋を造り愛戀の情を以て監守とし歡樂を以て門門となしたり其外郭には宏大なる高く厚き壁を環らし其門は黄銅を以て作り百人の强夫にあらざれば之れを開閉すること能はざらしむ其時は非常の響を發して其音半「ヤツヨナ」の外に聞へしむ猶其内にも二重の門を作り凡て三重にて容易開通すること勿しむ且之れには王の忠實なる守衛を置き命じて太子にもせよ如何なる者にもせよ此門を通らしむること勿しめたり

第三篇　看老病死悟世非常

太子悉達は宏壯美麗の宮殿に住しいと樂しき境界と愛戀の内に打暮し少しも乏しき事痛み苦又老ゆる事死する事等を感ずること無く安穩豐樂におわせしが時々夢幻の如く煩惱界の有樣を思惟觀察し玉へり一日ヤソダハラ妃の胸にもたれうとうとと睡り玉ひしか妃は太子の顏を扇ぎ參らせしに頓に覺て余が世界よ世よ我れ開けり知れり我れ來れりとさけび玉ふ妃は驚き悲み如何に恙あらせらるゝやと尋ぬるに此時太子の容貌は變て恰も天神の如く慈悲を感ずるの狀滿ち溢たりしが暫時して笑を含妃を慰め音樂の興を增さしむ此處に桐梧を糸につり懸け風之れを皷して自ら音樂の響を發せしむるの設けありて侍臣侍女は傍にありて其響の妙なるを聞くのみありしが太子は之れ

に應じて淨居天の空中に歌べる歌を聞きたり其辭に云く

われはさまよふ風の聲、世の安居る人々に、愁歎の聲を示せども、悟るものとてさらになし、見よや人の生涯は、めぐれる風の如くにて、愁ひ悲み泣きわめき、浪風あらくせめぐなり、そもわが來る處起る時、誰か知るものあるべきや、人の生命も是に似て、その世に出る始より、消ゆく後の終りまで、誰かしるものあるべきや、わかもてる靈魂い、永く傳ふるものにして、さらにけじめはなきものぞ、變るもやすき世の中に、いかで樂しき事あらん、さだかにあらぬ樂を、いかに樂みくらすぞや、變り易きは世のならひ、樂みありと思ふ間には、はや愛情も終るなり、さながら人の生涯は、いと丶短きものにして、風のまに〳〵鳴りわたる、糸の響に髣髴り、ア丶摩耶の子よ摩耶の子よ、われかあちこちとふきめくり、糸に響ける歎こそ、世のありさまをかおつなり、世の憂き事は充ち滿ちて、涙の泉は眼に滿ちつ、胸に兩手を拱けり、われは去きりに歎けとも、さとるものとてさらになし、憂の中に戯れて、浮きたる榮を爭ふは、浮べる雲に乘らんとし、河の流れを手に堰く如し、そも御身の出世こそ、濟度のためになからずや、世は待わびつ待ちにけり、暗の夜よ暗の夜は、愛の中にさまよへり、起きよ摩耶の子おき出よ、永く睡れる時ならず、われはさまよふ響なり、御身も共にさまよへり、安處を求むべし、憂世の爲めに恩愛の、かたき羈をたちきりて、浮世の歎きにつなかれず、救の道を指し示せ、そもわかふる丶白銀の、糸の響は世の人に此理をしらすぞや、今そかなたにふきさらん、御身は情の此影に、戯れ遊ふものなるや、

又ある夕方太子はヤツダハラ妃の手を取り共に多くの侍女の中に在りていと樂敷音樂を聞かれたりしが其音の絶ゆる間にひとりの侍女出て〻種々の昔話をなし始め昏黒時の興をそふ愛戀の事妖馬の事其他日の海に入る國にてはろこに住む人民は其色つや靑きものなりなどと話かたれり太子之れを聞き玉ひ賞歎しチツラは我に其面白き話しを聞せてかの糸のなりし風の歌を思ひ當たらしめたりとて妃に話の褒美として其所持の寶玉を與へしめつゝ汝は我が寶玉なり如何に此世は廣しといへ汝が如き者あらんや此世の中にも日輪の波の中に沒るゝ所ありや我等が如く同じなさけの心をもてる者ありや若し世の中に愛き艱難に惱める者あらば此を助け慰めんは余が望む所なり余は常に怪む何れの國の人々が旭日の輝き昇る光を初て見るならん余

は又日の入るを望む毎に奇異の思ひ起れり余は汝の如きやきしき懷にもたれ汝の腕によりながら悲み慨きの種子ともなることあり此夕日の沒るゝ所には如何なる人々の住みをるや又此外に廣き世界有りて恩愛の物思ひともあるところあらん今余が思ひ勞ること如何なる樂みを以てるとも誘こと能はざらん希くは今話せし如き駿馬に打乘り異邦の地に至らんと欲ふ然らされバ余が殿宮を彼の背に打乘せて地のはて迄至らん然かざれば我が體化して隼鷹の翼を得たらんには白く雲間に聳ゆるヒマラヤの頂上に止り地の端何處ともなく望まん。ことを欲ふ實に我今に至る迄凡て此等の事を量り知らざりき余に此からかねの門外に如何なる物ありや告げ知らせよといひ玉ふ一の侍臣答へて此門外に最初あるものは市街にしてそれより堂宇、園囿、森林、

田畑、等あり之れに次て新田あり原野、草莽、相連り其後はヒンバサラの領地あり此世界は斯く廣大にしてしなしといふ太子聞きて喜び玉ひ我れ善きことを聞けり然れば我れ出で〻四方を巡見せんとす故にチャンナ(車丁之名)に命じて駕を用意せしめよと茲に於て大王の臣太子明日午時城外を巡覽し玉ふと奏す思慮深き大王は之れを聞き玉ひ今は既に太子に示す可き時なりとて使を出し市中の人民に布告して各〻市街を飾しめ汚穢の物を掃除し盲目、癈疾、其他病める者、老ひて衰へる者、癩病不具者等、一切目に觸れ害となる者を出さしむる勿れと命じたり人民は大王の命により市街を清潔にし敷石をみがき水を市街に灌き婦女は我れ先きにと門前を清め花環を懸け連ね戸を磨きたて壁を塗り直し木の間には旗風に飜り佛像を磨き飾り四街の隅角木の葉の下までゝやけり如此く市街ハ飾り裝はれ清められ眩きまでに見られたり又王の使は鑼と大鼓を打鳴して當日凡て凶事を出すこと勿れ盲目、癈疾、其他病める者、老ひて衰へる者、不具者等を出さしむる勿れ、又葬送の營みある者も決して日の暮るゝ迄出す事なく屍を燒く勿れ、是れスウッドダナ王の命令なりと呼はしめたり斯くて其當日に至りカピラバツの市街は清淨奇麗に磨きたてられたり太子は美しく飾りたる蒔繪の車に乘り二頭の白き幼き牡牛は之れを牽きたふ〻と肉は咽の下に垂れ蒔繪の衡は牡牛の肥へたる肩の上に横たはり多くの人民は喜悅の色を顯はして歡呼しつゝ太子を奉迎し太子は之を見て顏色いと麗しく太子をして此等の人民の此く美麗の裝を爲しいと喜ばしく笑を含み實に生活は樂しきもの〻如く思はしめたり太子喜で

のたまはく實に世は樂くして我を好み人民は我と同じ王には非ざれども我を親み愛し婦女等は仕事見守りに骨折りて互に喜ばしく見もるは何か我等の爲せし報ゐや何故彼處に居れる小兒はかく喜びて花を我等にまきかくるや彼れを携へ來りて余か車に乘らしめよ如何に此等の人民を支配せばいかばかりか喜ぶことならん彼等は唯我か出來りしばかりを見て斯く樂めり我は此喜悅和氣に滿てる市街をたもつ事を得ば何の不足も無しチャンナよ今此門を過きて余が未だ見さる處に進と太子は門を過き玉ひしとき多くの群集は車駕の左右に集り牡牛の前を走りて花環を投ずるあり或い牡牛のそばにより絹の如き毛を撫る者あり或者は菓子や米を捧け來れるあり「幸なる哉幸なるかな尊き太子よ」と叫ひ多くの人々は唯喜びに滿たされて和樂平安の有樣にて大王の命せし如く諸々のもの尽くよろしきを得たり然るに既に車の道路を過ぎて半ば頃に至りしとき草屋の間より其處に匿れしものと見へ。いと古びたるひとりの老人爛布ときれくずをもて身を纏ひ、よたよたとはい出たり、其老人は深く皺たちて日に燒かれ暗黑くして身は骨と皮ばかりに痔衰へ腰は年月の重荷を以て伏しかゞみ眼眶は痿れて涙にて滿ちつめ齒は拔け落ち腮は喜びと恐れを以て振々と震ひ皮ばかりに皮せたる片手を蹶めく腰を運ばす爲めに磨りへりたる杖をさゝへ片手を肋にあてゝと苦しげに呼吸しつゝ號て惠の施を與へられよ我が命最と細くして明日か明後日消へなんばかりなりと頻に號び憐を請ひたり其時さへも老人は咳嗽にむせかへされ苦げに見ゆれども猶手を差し延し痙攣と苦痛の中にありながら頻りに施

しを請ひにけり其時多くの人々い周圍より扶て老人の腰を他に扭ぢ廻し路より外に追除けたれとも太子は既に見玉へり太子の言くチャンナよ彼れを去らしむる事勿れ彼れは人の如く見ゆるが何あるものそ誠に瘠せ衰へ凋疲れて見るも憫然の有様そ人にても如此つたなく生るゝてとありや今彼の老人の言ひし如く明日にも明後日にも死なんと憂の聲を發せしは何なることそ彼いかく瘠衰るばかり何の食物も得ざるや如何に不幸の者なるやと其時車丁一人進み出殿下彼は唯年老たる一人にて八十年以前には彼の背も眞直眼も明う身體も壯健なる者なりしが知らず〳〵過き行く年月の爲めに體の液吸ひ取られ心と思ひは鈍く力は拔き取られ體の膏い盡く燃へつくして唯燼となりたる心ばかりにもて今消へかゝらんとする燈火の如し之れ年老ゆれば自然の有様なり太子御心に懸けさせ玉ふなと云へり太子之を聞き又尋ねて曰く此れい人々の受くべきことか又凡て世の人盡く之れと同じ様にあるものなりや或は此者一人にかされる者ありやとチャンナ答て殿下何れの者と雖も皆年老ひぬれいみな〳〵此の如きことありと太子又問て曰く余れも久敷長らへ年老ゆれば彼の老人と同じくあるものなりや又ヤソダハラも年老ぬれはかくなる者なりや其他ジャリニー稚きハスタゴタミ及びグンガも其の如くなるやと御者答へて然りと太子之れを聞き我れ圖らざりき思ひもよらぬ者を見たり速に車駕をかへし余か宮殿にいらしめよと命じ玉へり

太子は此事を見て心に深く思ひ量りて壯麗華美の宮殿に居ると雖も鬱々として樂まず常に悲みと憂を含みて美果膏油珍膳の前に列なる

と雖も食し玉はす美女歌舞妓等相集ひて種々の歡樂を催せども少し
も樂みとし玉はすヤソダハラ妃は之れを愛ひ涙を流し慰めども憐れ
無情なることと話すの外少しも餘のことを語玉はずヤソダハラ曰く
何故妾等と共に樂み玉いざるやと太子答へて余が愛しき者よ余は此
樂を見るごとに悲みの種となる計りにて今此の如く樂しみ互ひに愛
し暮せども永遠此有樣にて續く者に非ず必ず終あり遂には愛情も滅
樂みも滅し老る計りにて思へば哀みを增すばかりなり其れのみなら
ず我と汝は終日終夜共にありて暫くも相離れず愛戀の情倘謬そゝろ
に一體の如き思ひあらしむれども光陰といへる者ありて絶へず汝の
美貌と德質と余が戀情を奪ふことと日の暮るゝ頃暗夜の知らず〳〵來
りて今迄輝きたる夕日も何時の間にか奪ひ盡されて暗黑となるが如
し我れ此事を考へてより恐怖の念を發し余が心暗夜の如し故に我れ
如何にして此愛情の光陰の爲めに奪はれざる其法やあると考へ出さ
んと勤むるなりと此時より太子は終日終夜眠ることなく愛に滿ちて
端座思惟觀察し玉へり此夜父スッドダナ王は奇異の夢を見たり ‖
第一の夢は一ッの大なる幅廣く晃々としたる「インドラ」の記號ある旗。
日の光に輝きありしが卒に大風吹き起りて此れを微塵に裂やぶりた
り其時一群の奇異の象現れ其の破れたる旗を拾ひて宮門の東の方に
荷ひ去り第二は銀の如き牙と白き足の大なる象の一群地を震ふばか
りに歩み來りて南路を進みたるか太子は其の先導の象に乘れり第三
は光輝眩ゆく曄ける車あり四頭の馬之を牽き其勢ひ猛烈しく鼻よ
り白き煙を出し齒をかみしめて白き唾を流したるありて其中に太子

は坐せり第四は一車輪の回轉せるものにて其轂は輝ける黄金にて幅は寶玉を以て作り上に瓦ありて奇異の語を書けり其回轉するときは火炎を發し音樂の響聞へたり第五は一ッの大皷ありて市街と陵との中央に置かれ太子は之を鐵槌を以て打ち鳴らし其音雷の如くすさまじくして遠く空中に響きたり第六は高塔にして其の塔益々高くありて其頂上空に聳へ雲に摩する計りなり太子は其頂上に立ち美麗の光輝を放てる寶玉を四方に撒けり其狀恰もシャランス及び碧玉の雨降るか如く世界の人民は盡く塔の四方に集まりて寶玉を爭ひ拾へり第七は愁聲四方に聞へて六人の現はるゝあり皆悲み歎き齒をうみ手を口にあて哀痛に滿ち歩みかねたる樣を見たり

王は此の七の夢を見たれども未た一人として此夢の知らせを解きあかす者なし王大ひに之を憂ひ我が家に凶事の來れるあり是れは如何なる前兆を諸天が我に示せる者あるや一人として之れを我に知らしむる者なしと人々市街に出でゝ王の夢相を解かんとする者を求めたれども一人として得ざるを以て悲めり其時何處ともなく鹿の皮を着たる一老人王宮の門に來り呼びて云く我れを王の前に出せ我能く王の夢を解かんとやうて王の前に出で一々大王の夢見玉へし七の夢相を聞き終り恭しく躊躇して言く嗚呼マハラジャよ王宮に於て斯く瑞祥の告を得玉ひし事を賀す其光榮普くして日輪の光より强し見よ是の七の夢ハ恐らくは七の喜びの知らせなり第一に陛下の見玉ひし「インドラ」の號を持て光り輝きたる大なる旗のすてられ又之れを拾ひ去りたるは舊き信仰の道は棄てられ新しき信仰の道の生る前兆なり又

之れによりて日過き「カルパス」過きたるは諸天及び衆生に變化を來す
なり次に十の象群の現はれしは智慧に臨める十個の賜を表し勇氣と
強さに據りて太子は眞理の爲めに此世の樂を捨るなり次に四頭の駿
馬の炎の呼吸をはき走れるは太子の暗黑と疑惑に曇る世を喜びしき
光の中に導かんとし玉へる四大德を表せるものにて燃へたる黃金の
轂の輪の回轉れるは輪廻の大法を示すものにて太子は衆生の前に輪
回の大法を說き示さんとし玉へるを表せるなり其次にハ太子の太鼓
を打ち其音遠く聞こゆるは太子の大法を說き玉ふ其聲雷の如く四方
に鳴り渡れるを表せるなり次に高塔の高く聳ゆるは太子の大法益々
盛になり寶珠の如き貴き法語を總ての衆生及び諸天等の望み受くる
事を示せるなり次に六人の悲み憂るは太子の敎訓に因り大法を覺悟
し六人のもの六大弟子となり大法を敎ゆるの師となる瑞相なり陛下
よ此吉夢により太子の受け玉ふ尊榮は王宮の榮華の貴きよりも鴻大
にして太子の着玉ふ爛布の衣は錦繡綾羅の衣よりも尊からん今陛下
の見玉ひし夢は必ず此七夜七晝の間に成就せんものなり老人はかく
語り終りて八度平伏し三度地に叩頭して王の前を去れり王は此老人
に物を賜はんと人をして其後を追尾めたりしにチヤンドラの寺院に
至り其內に入れり使もおあしく入るに何の影形も無く唯龕に梟の皷
翼するを見しのみと蓋し諸天ハ時々斯の如き形をなして顯るゝこと
あり王は此事を聞てより大ひに憂ひ如何にして太子の心を遊興歡樂
に醉ひ耽らしめんとて種々新しき遊興を增さしめたり又られのみな
らず王宮の門々には二重の守衛を置きたり王は斯く嚴重に成したれ

ども如何にして天運天命に逆う事を得んや太子は再び王宮外に出で此世の有様を見んとするの念益々烈しく若し此世の生命が渚汀の波の唯憐にも虚無に歸することあらざりしなれば樂しかるべしとて一日太子は父王スッドダナに請て曰く願くは兒をして市街の實狀を巡覽せしめられん事を欲す先には格別の思召を以て市街の人民に布令を出し凡て市街を掃除清潔になさしめ凶事其他目に觸れよからぬ者は取去らしめ人民をして喜びの色を表はさしめ種々の飾りを爲さしむ兒熟々之れを考るに是れは人間の常々暮す有様に非ず然れば兒大王のもとにありながら人民の日々の暮しかた及び市街の有様と日々働ける模様等を知らざるときは心もとなし父王よ願くは兒をして人知れず宮殿の外に出さしめよ之に因りて兒大に學ぶところ悟るところあらん益々智慧と滿足を得んや希くは明日侍臣を伴ひて思のまゝに市街を見物せしめよと王ハ諸大臣と共に之を聞き云く第二の巡覽は最初見物せしときよりも猶思ひ悟らしむることあらん恰も隼鷹の初めて頭巾を脱し目新しき有様を見驚くが如き事あれど返て自由あらしむる方よからん然れども一々太子の見しとと其の思の如何に働きしゝを來りて我に告げよとの玉へり扨て翌日太子とチャンナは王の命によりて開かれし門を出てたり其時太子は商人の如くチャンナハ手代の如き裝をおし人々の目に立たざる樣になしたり太子等二人は市街道路に歩み出で釋種の中に入りて悲しき事喜ばしき事の有樣を見たり街衢、道路は畫の賑ひにて人々群集し商人は穀物や香料の積み重ねたる内に跌坐し買手は財布を荷ひ、掛引の聲騒しく互に利益

を計らん爲めに戰爭の風味を爲せる者あり街衢を通れる者は道を除けさせんが爲に號び重荷を積める牛車等の轂互に相接し其響殷々雷の如し籠荷ひは歌を謠ひて走り象は汗に濡ひ家婦は子供を背に負ひなから井より水をくみ互に挨拶にいそがはしく糖菓を商へる店は蠅の群に充ち織工の機によりかゝれるあり綿を紡績るあり礎は響きて粉を作り犬は食を爭ひ武具師は鋏鉗と鎚を以て軍衣を作れるあり鍛工は鶴嘴鋤と鎗を火中に燒き學校に集りたる多くの小供等は「グル」の四方にいと嚴格に半月形に坐りて讃歌をうたへり大小諸天の事を學べるあり染工は黃赤青に染めたる衣を桶より出し日に晒し兵卒ハ劔と楯と持ち市中を横行し駱駝使は駱駝の背に跨り驕れる「ブラマン」あり勇壯なる「クシヤトリヤ」あり賤業をなせる「スドラ」あり蛇つかひハ多くの見物人の中にて腕を毒蛇に卷かしめ喋々と辯するあり或は桐梧の笛をならして蛇の睡を起し躍らしむるあり皷や笛を持てはやしたて賑はしく婚姻の迎へを爲せるあり家婦はひろかに種々の供物を持ちて神前にそなへ夫の安全に商より歸るを祈れるあり子の安產を祈れるあり黑々と日にやかれたる陶工は露店を張り燈火と花瓶「ロータス」を賣らんが爲め金を打ち鳴らせるあり太子等是れより寺院の壁にろひ門を過き橋を渡り外に出しとき路傍に悲しき聲を出し希くは我を助けて立たしめよ我が病甚しうして家に達する前に我死せんと頻りに扶助をもとむるを見たり此者は非常の劇疾にかゝれる者にて肢體戰ふて砂と泥とにまみれ皮膚ふくれて小瘡滿ちて紫色をなしひや汗は額に流れ口は痛に堪へかねてふるい目は見張りて恐ろしく左右

の地にある草をつかみ木に寄りかゝり立んとして倒れ肢體ふるひ最と慘刻の有樣なり苦痛の餘り號泣して苦るしいかな善男子我を扶けよと太子此狀を見直ちに走りて病人の傍に至り手を以て病人をさゝへ自己の膝に頭をのせ是れを撫でさすりて慰めつゝ問ひ玉ふ汝の病は如何なるものなりや汝は如何にして此病に罹りしや何故汝い立ち能はざるやチャンナよ何故に此者は斯く苦しみ喘ぎ跪くそやとチャンナ答て太子よ此れは時疫に冒されたる者にて腑内は惑亂し脈の血はもへたちて溢れ心臟は錯亂して皷動亂れて大皷と亂れ打つが如く筋肉いゆるみて弓ずるの切れたるが如く既に力い脚や腰や頸より拔けて人間の摸樣は盡く變したり此者を見られよ苦痛のあまり虛空を攫みもがき胸は鼓動烈しくして亂れ齒は嚙みてすれり呼吸い苦しくして煙に咽るが如し見られよ今此者は死あんとす病毒は四肢臟腑にまいれり感覺は盡く失せ生命の去りたるときは苦痛盡く脫して痛を感ずる事あし太子よ今彼れをささへ玉ふは宜しからず却て御身に病の傳染り害の及ばんことあらんと

太子は猶も病者を撫恤りながら問て云く如是病み惱める者は他にあるや又多くありや我と雖も彼の如き病に罹ることありやとチャンナ答て病といへる者は何人に限らず色々の有樣にて來る者にて傷創、狂癲、中風、癩病、赤熱、下痢、潰瘍、腫物等ありて人々の身體を犯し惱ますものなりと太子又問ふ斯くの如き病は顯れず知られざる中に來る者なりやとチャンナ答へて然り其の竊に襲ひ來ること恰も毒蛇の刺さんとする如く虎の草莽やカルンダの森に藏匿不意に襲ふが如く電光の落

ち來るが如く病の來るや計り知る能はずと太子云く然らば人々は皆疑懼の中に暮せる者ありやと然り太子よ皆其の如く日々に案じ暮せりと太子云く然らば諸人皆我は今晩安全に眠り明日恙なく日をむかへんと云ふことを得るやとチャンナ答て決て其の如くいふ事能わずと太子又問て云く然らば此の種々の病苦をあやみたる後此の衰へたる體と心とに來る者は老衰といへるものなりや然り人少しく活きながらへば老といふもの來るなりと太子又問ふ若し人病苦に堪へ忍ぶことと能はず或は堪へ忍ばざるの餘り或は此老人の如く病に苦み痛み猶活き長らへ益々老年に至りたるとき其の極となる者は何なりやとチャンナ答へて人々皆死するなりと太子云く然らば死ぬかチャンナ答へておわりに來る者は死なり死は常なく何時とおく來るものなり故に多く病苦の爲めに惱みてながらゆる者少おく年老ゆる者と雖も又盡く死せざるへからす既にして太子の眼を擧げ遙かに臨み玉ひし時河畔に沿て慟哭せる人民の一群歩み來れるを見たり行列の最初に進める者は火を盛りたる土の器を持ち後に從ふ者い親戚故舊の者と見へ皆喪服を着たる者にて高く喚てラマラマ開けよラマによべ兄弟よと云へり次に來る者は棺を荷へる者にて四本の竹を左右四方に渡し硬くしやちてぼり目もわてられぬ屍を赤黄に粉を塗りて其上に載せ行き既にして上流の河畔に沿ふて薪を堆高盛れる處に至りしとき頭を前にし其上にをろをラマラマと號びて薪をまする其上に載せ永遠寢りに歸する臥床を設けたるが如く其人は寒の爲めに既に感ずるまと無く空氣に裸體の儘にさらさらるゝなり斯くて火を四方より

薪につけたり火は風に動かされ増々四方にひろがりて屍に移り乾ける肉や筋骨は裂け既に黒煙の游らぎたる頃は暗白みたる灰のみ殘りて白く鼠色の骨は此處彼處に散り亂るゝを見るのみ

其時太子又問て如是くあるは生活の終りに來る者なりやとチヤンナ曰く然り斯く人の成りはつるゝ何れの者と雖も皆受る者にして免れ難き者ありと燒柴の堆に殘る者は彼の一部分にして四邊に集まれる鴉は其屍の食ふべき處なきを見て飛び去るが如く實に墓無き次第あり

斯くとも此世の人は知らずして飲み食ひ笑ひ樂み暮せるは實に淺ましき限りにて野山の狂風、路傍の轉躓貯水の毒、毒蛇の刺、荒れ馬の傷、酒寒、魚骨、墜瓦等の些細なることの爲めに命の消へはつるものにて既に死せしときは飢へ樂み痛みを知らず接吻火燒も感覺なし其身燒かるゝも何そ其臭氣を嗅ぐを得ん香料薫味を知る事なく味は既に口より去り耳も聾の如くにして少も聞こゆる事なく眼はさらに見ゆる事なく悲めども感せず體は命の燈の如くなれども唯腐て蟲の餌となるものにして實にはか無き無常の者なり斯くなるは貴きも賤き者も皆ある事にして死せざる可らず死して後は古の敎へにも言へる如く生死回轉して又生れ苦みを受け又死して燒柴の灰とあるのみあり斯くの如きは人の此世に暮しはつる有樣あり

此の時太子は是の事を見此事を聞き悲悶の心胸間に溢れ眼は涙を含みいとゞ此の浮世の有樣の實に憂き事を感じ之れを救ふの心深く天を仰ぎ地に俯し蒼穹を望み心思寂寞として之れを考へ彼れを思ひ過

きたるを求んとし知らんとし見んとして想像と反省に狂ひ惑へるが

如き有様あり

斯くて太子の容貌は世を愛するの念燃るばかりにして望の熱心をさへ難く見へつゝ自から云ひ玉ふ嗚呼此憂き世よ我れ知れる者及び未だ知らざる者も皆死と悲みの網に捕はれて生命に結び付きたり我は此世の苦と悲に満てるを知り感せり此世の快楽は浮きたる者にて如何ある無上の快楽といへ唯戯れの如く却て快楽は苦痛の種となるものなり楽のはては苦痛なり小壮のはては老となり愛い益々消へうせ生命はいま〳〵しき死とあるものあり人の死は恰も無明の生命に入るが如く輪廻の衝にかけられて唯苦痛と無常の栄華に回轉せる者なり此世の有様は我等を誑惑するの誘の如く見へ小波は絶へず花盛りや小森の中を流れいと麗しく見ゆれども終は唯潮の海に入るのみなり我が曇い既に晴なんとす我れも此人等の如く同く天に求むる者あり天は少しも開かず少しも心づかざるが如し然れども世の救ひなきに非ず我等は救を求めざるべからず諸天も猶弱くして却て救ひ助くるの力あく諸天も他に救を求むる事あらん我れ其の救の道を求め得たらんにい人々を救じといふことあらん「ブラヾ」は天の道を敎ゆれども人を救ふの力なければ敎とするに足らず眞天ありとも人を救ふの力なければ眞天に非らず チヤンナよ我等今歸らん今見し事を以て満足せりと

大王は凡て太子の其日のありさまを聞き益々愛ひ黄銅の門には二重の守衛を置き夜とあく晝とあく出入を禁じ夢の知らせし七夜七晝の

終に達る日を待玉ひけり

第四編　踰城登山學道

既に太子は王宮を逃出るの時來れり之に因りて今迄樂みに滿ちし王宮も變じて哀哭の聲となり大王の悲み言ん方なく人々は憂へ歎きたり然れとも是れ一切の衆生を濟度し大法を說き己れと衆生の爲めに解脫を得せしめん爲なればなり

チエイトラシユッドは滿月のときにて夜氣淸く月は皎々といと朗かに平野に輝き渡り「マンゴー」「アソカ」の花は開き亂れ暗香蓊勃として風に靡りラマの生日は來れり田野市街は喜び祝ひ瑞祥洋々たりビシユランバンの野には星の光煜々として照り香花ハ馥郁として夜氣玲瓏たり涼しき風はヒマラヤの高峯の雪をかすめて吹き月は走りて峯巒に攀ぢ登るが如く月影は漣に漾ひ波紋に映じ岡谷間平野は靜閑にし

て月光透徹隱約として銀色を呈し王宮の屋瓦は高く聳へて銀宮の如く夜は靜かにして森々何の聲を聞くことなし唯聞てゆるは「ムットヲ」と「アレガナ」とて互ひに番兵の呼べる合語と警固の爲めに打ち巡る大皷の音のみにて時々食を爭へる山狗と鼠に啜ける蟲の音の聞へるあり月は王宮の網の如く敷きつめたる敷石に映し紋大理石の樣と眞珠の如く輝ける壁を照り通して瑤の宮を隈なく輝き渡せり、内に多くの艶麗なる宮女ありて恰も「デヒ」梵天界の宮闕の如く太子の爲めに撰び召されゝる者にて婉婉嬝嬝其美しき事一層あり其安すやすと睡れる樣の美しさは貴き珠玉の連るか如く玉店に入り多くの寶玉を見て眩くあらしむるか如し宮女等は何の思ひ量ることなく何の憚ることも無く安すゝと伏睡りうよわき腕をあらわせるありつゝめるあり黑

々としたる鬢髮は黃金と花を以て飾り解けたる黑髮は頸じにまとひ嘸や樂しき夢にまどろへるあらん其樂しく眠れる樣は恰も寶鳥の語ひ囀り終日の勞をやすめん爲め頭を翼の下に入れいと安々と塒に在りて夜の明るを待ち囀り始めんとせるが如し、銀鎖にかゝれる瑤燈は香油の薰芬々として光輝を放ち月光融和にして内に寐れる多くの美女の光影相入り交り妙なる容顏秀眉あり〳〵と鬢髮の頰の上に垂るあり手を結べるあり離せるあり白〳〵としたる齒を顯せるありて白玉の連るか如く、やさしき腕と足にまとへる圓き鈴玉の音い體の動く毎に微なる音樂を發し宮女等の舞踏や太子の褒めし音樂や貴き指環を見出せし事とか或はよき褒美を得たりし事などの樂しき夢を此音に破らるゝあり中にも琴を手に持ち横たはりて指を絲にゝけ音樂を

奏しながら其儘睡れるあり又羚羊と共に其角を懐にあて睡るあり羚羊は薔薇の葉を蝕ひながら共にうと〳〵と假寐せし者と見へ美女の手にいばらの枝もるく、はざまり羚羊は半ば食したる葉を其口にあてたり又二人の美女は互ひに「モグラ」の花を花環に織りながら假寐せし者と見へ互ひに胸と胸とを枕にしてもたれ眠るあり又頸飾にせんとて一人は瑪瑙や白瑪瑙白玉珊瑚其他色々の玉を繋ぎながら睡りたるあらん彩なせる碧玉は種々の寶石の中に交りて腕の左右に璨々として輝き散りたりかく多くの美女は此瑤宮璃闕にあり美しく柔らかき毛氈の上に園に流るゝ水音をろへて翌日も又樂く面白く暮さんとて睡れり此樂しき境界は太子の前殿の光景を寫せるあり其奥は深閨にしてグレガ、及びゴタミ等の諸大臣も皆この宮闕殿裡にありて睡れるあり

深閨の入口には白檀樹に種々の彫刻をなせる弓形門あり上より錦繡を以て織られたる紅碧の慢幕をかけ是より三段の階を登れば深閨にしていと奥深く華美を盡し錦繡綾羅の高床は軟らかくして足之に觸るれば恰も美花の上を歩むが如し左右の壁はランカの波の中にある具より磨きあげられたる眞珠をちりばめ蟹石の天井の四方には青寶、石、綠寶石、珠玉紅寶石、を以て鏤めたる花鳥の彫刻あり欄干には方眼の格子をはめ連ねゝ之れよりは庭園より吹き來れる涼風香氣を伴ひ月光と共に交り入りて室内を爽かならしむ其中に居る者は愛戀の情こまやかにして寵愛深き「ヤソダーラ」と釋迦種の太子悉達あり耶輸陀羅妃太子の傍にあり半起きかゝらんとして額に両手をあて太

子の手に吻せること三度にして三度目に太子を起し我が君おとて目を覺し妾を慰め玉はざるやと太子は如何なる事なりやと辭終らざる内に「耶輸陀羅妃」又語を次き今夜に限り妾いと樂しく睡り御胤を宿せしことを確かに感じたり爲に妾が胸は恰かも音樂を聞くが如く一方あらぬ喜びの動氣せり然れと其中に三つの悲しき夢を見たりゆへに恐怖の思ひ絶へ難し扨て最初の夢は牧場の王ともいへる枝角を生せるいと大なる牡牛あり市街の方に歩み來れり其額には天より落たる星の如く妖蛇の珠玉の如く璨々と輝きたる寶玉を戴き門の方に靜かに歩み來れり其時「インドラ」の寺院にて聲あり若し此牛を止めざるときは市街の繁榮は盡く失んと然れども之れを止むる者一人もおかりき妾之れを聞き大ひに悲き哭き走りより牛の頸に懐きつき其中に門の栓をおさしめんとせり牡牛は鳴きなから妾をふり捨て門を通り守衛を蹈み倒して進めり第二は四つの華麗ある裝束せる「スメル」の天軍いと美はしき多くの扈從を伴ひ「スメル」山より降れり其速なること電の如く眼光煜々として市街に來るを見る其時頓に市街に「インドラ」の記號ある旗空中より飜り降り門の上に止まりしが其旗は銀の如く白くかゞやける糸を以て碧玉を織出せる者にて其美はしき事きら〳〵としてに映じ炎の燃るゝ如し其光り瞬間にして奇異の文字を現せり衆生は之れを見て喜びたり時に旭の光り照り渡り東風そよ〳〵と吹きし時寶玉の卷物は開けて皆讀むことを得たり又空中より奇花雨の如く降り其色珍らしくして地上にはたへて見さるものあり「太子」之れを聞き玉ひ汝の見し夢は皆吉兆なりと「妃」は又語をつぎて其夢の終

る時は近けり近けりと號べる聲あるを聞けり第三の夢は妾御身のそばに寄らんと御床へちかく至りしとき御衣は脱ずて御枕ゝ其儘にありて尊體の其處にあらざるを悲み求めたれども得ず猶睡りしが寶玉の御帶は妾の胸の下に纏はり暫時にして毒蛇と變ぜり妾が腕環は取れ去り黄金の足飾は落ち鬢髪にまとへる「ジヤスミン」の花ゝ變りて蘆芥となり高き臥床は落ちて地に沈み紅の幔幕はさけ散りたり、されのみならず白き牡牛の聲は聞へ錦の旗の飛び飜るを見たり其時聲あり時は來れりと妾之れを聞とき其聲深く妾が心に徹し思はず目覺めたり之れは如何なる凶事ありや妾か死せんとする兆ありや妾は今殿下に棄られんとするや思へば悲しき事一層ありと「悉達太子」いと愛しく泣き潜める耶揄陀羅夫人によりかゝり之を慰め決して憂ること勿れ然れと汝は猶樂といへる者は永遠變らぬ者と思へるや汝か夢してとは今來らんとする前兆の影にして諸天が如何に力を盡すとも世がいかに成りゆかんとも汝は我れに來るべき出來事は如何になすともせんすべなし然と之を憂ることなかれ我ゝ汝を愛せり汝は我が最愛の「耶揄陀羅女」なり汝知れ我は久敷以前より常に此世の憂き有様を救はんとて思ひ惱り今其時來れるは其時至れるなり我か魂は衆生の爲にいたく物思をおし我か悲みは我れに悲ありて憂ふるに非ず深く此世の憂苦を思ひ計て悲めるありさらば能くこの事を明めよ我が思立ちし念は強くして恰も翼を得たるか如く自ら衆生と共に此世の憂苦難難を受け救の道を見出さんと欲す我が深く愛せる者よ此事を悟れ汝は我が子の母たり其子も我と同じきよき望を懷ける者

あり然れば家鳩の住み馴れし巣をしたい何處に至るとも慕ひ歸れる如く我は衆生を慈み慕へり然れと我が魂は何れの陸何れの海に漂と も我が心は常に汝にあり我れ汝を愛せるとと深くして二ともなく我か心は汝にあり故に如何なる事の後に起るとも今汝が夢し牡牛の事及び落ち來りし旗の顯れし事などを思ひ謀れよ汝は我か最愛の妻なり我が思ひ立ちて衆生の爲めに盡すは汝の爲めに盡すが如し然れば悲み愛ると勿れ若し悲み歎くてとあらば常に我等の悲みは世の喜び と平安とあるとと丶明らめよ汝よ物の道理を辨ゆるあら物の大小輕重を計り互ひの愛情の強くして堪へ難く其益する事の少なきを思ひ衆生の爲めに恩惠喜悅の生じ其功德の大なるを思ひ知れ然れば我れに接吻し我か語りし言を聞きわけて夢〳〵愚痴の心を出す勿れ我れ衆生を愛せるは即ち汝を愛せるなりはや睡れ我はをきて汝を守らん とかくて妃は眠りしとき再び同じ夢を見たりけん唯泣じやくりと歎息の聲のみ聞へたり何處ともなく聲ありて時は來れり〳〵と太子頭をかへし見あぐれば月は照り渡り星はきら〳〵として幽閑さも太子を誘ひ出さんとせるが如く太子をして榮華に暮すか眞理の爲めに苦むか諸王の王となるとを望むか家も無く愛き艱難に暮すか其決定は此夜あり之れにより世は救はるゝなりと云ふが如く見へたり其時何處とも無く陰暗の中より微かに響ける聲あり恰も(淨居天)の風に歌へるか如く諸天等は此時太子の四周にありて守衛れり

此時太子自ら語りて云く我れ今去らん既に我か出離發心のとき來れり、親愛ある眠れる者よ汝の愛らしき唇は我か世を救はん爲め逃れ出

るを引き止め我身は裂れんとすれども我か願は止め難し彼處の虚空に我が運命を知らせる使等飛び廻るを見る之れ我れに出離を促せるなり我が來れるは世を救はん爲めに來れるなれバ絶へず畫となく夜となく我が大願を遂げしめん爲に誘へり我は王冠と戴き王位に登り權威を恣にし干戈を動かすを好まず我は戰場之勝者となり我か車駕をして修羅の巷を走り血に塗れ長く歴史の血書となることを好まず我ハ忍耐と清淨を以て此世の道を歩み地の塵芥の中に伏し寂莫荒蕪たる所を以て我か住居とし鄙賤の者を以て我が友とせん我か衣は爛布の弊衣にして我ゝ食は人の情により惠み與へられたる者にて我か居宅は宮殿にあらずして巖窟草莽ありかく我が苦痛辛惨を嘗むるは皆一切衆生を救はん爲ゆゑ故に我か耳は衆生の愁歎懊惱の聲に滿ち我か魂は世の病苦を惠み救はん爲めに滿てり故に我ハ非常の苦痛と煩惱の棄絶とを以て烈しく己れに戰ひ己れを犧牲として衆生を救ふの道を見出さんと欲す大小の諸天等は衆生の苦疫を救くゐの能力ありや何か衆生の祈願に應せしてとありや誰れか其功德を受し者ありや衆生ハ諸天等の爲めに宏大の寺院を建立し供物燈油を捧げ多くの僧侶を養ひ「ビシュヌ」「シバー」「シュル」等の名を呼で祈願すれども誰れか其功德を蒙りし者ありや、長々しき經文を讀み祈禱を捧ぐるとも其功德あらざれば日々立ち昇り立ち消る煙に外あらず實に衆生を欺けるの甚しと云ふべし之れにより誰れか此世の痛苦を免れし者ありや誰れか己れの過害を免れし者ありや、誰れか疫病、瘧疾、老衰、死滅、の苦を免れ生死、輪回、應報、を避け再び生れ來り苦みなゝらへ戯の如く夢の如

く此幻の世の業因を遁し者ありや、婦女等は日々讃歌を謠ひ乳酪及び美麗なる「ツルシー」の葉を捧げ祈願をこらせども其功德を得て產の苦痛を遁れし者ありや、諸天にも善天あり惡天ありて衆生を化度するの能力を有る者少からず又慈悲なるあり無慈悲なるありて人間の如く同じ輪回の車にかゝり環れる者にて前生後生を知れる者なり我れ知る經典に敎へらく微細の物より蚊、昆、虫、飼、匈蟲、及び魚、鳥、獸、人、魔、鬼、諸天諸佛に至る迄何れの者といへ一度生を受けたる者は盡く輪回の車にかゝり絕へず循環せざる可らざるありかく輪回の車にかゝれる者なれど誰れか輪回の衡を除き咒の道を遁れしむれば諸天衆生等は其恩により過去の苦痛を遁れ無明を照さん若し世に救の道か有るあらば又救はるゝ術ありて又歸依する所もあるならん實に墓無きは人間にじて恰も冬の風にあたり諸物の枯れ凋むか如く人の生命も此肉體を離れ死するときは燒柴の灰となるのみにして食を求むること狼の如く食ひ飽き僅か蒔れたる種子より獲たる穀物に生命を得て食はざれば語るあたわす食して始めて語り語りて漸々字を綴り學ぶことを爲せるものにて此人間等は如何して其善根の果を結び得るあらん然れば唯强く勵みて己れと戰ひ己を犧牲にするより外あかるべし今茲に幸福と尊榮の家に生れ富貴健康安樂にして諸王の王ともあらんとせる者にて遊興歡樂に滿ち人世の福德榮華を極め善を爲んも惡を爲んも唯思のまゝなる時に於て我れ少しも病わづらひ憂ひかなしみを受けしこと無く唯衆生の爲めに悲み衆生の爲めに己れを棄て己れを犧牲にし眞理を求め救の道を探究し天の極何處にさまよい地獄の下何

處かくるゝとも必ず何時か曇の幕の晴れきりて眞理と救ひの道は我が熱心に求むる眼の前に顯はれん既に歩み渡るの道開かくれば今迄我か世を棄て辛苦を嘗めし其報あらはれて死は死の苦みに勝さるなり抑も我が發心出離の功顯はれ我れ今棄んとする王位は諸々の一切の衆生を盡々憂苦痛困中より出し化度すること易きを得ん嗚呼蒼穹よ汝は我れを呼べり嗚呼悲しひ哉此世に我は汝の爲に此世を棄るなり我れは衆生の爲めに愛らしき我か妻にも分るゝなり我は汝に分るゝ事其情切にして堪へ難し然れと我は世の爲めに我れを捨ん我か情の種子は汝の體内にやとれり我其生るゝを待て樂まんと欲すれども時を待つは時機を失へるなり我が積日の望も盡く烏有とならん妻や子よ父上ヤ人々よ暫時我か爲めに悲み歎らん然れと我れ大法を成就し正覺を取る時ありて正法の光明に照しなはいかにたのしきことならん我が念決定せり我今去らん我れ今我か望を達する迄決して再び歸る事なからん我か熱心と勇氣とは眞理を探究して達せずんば忍んで遂に悔ざらん

かくて太子ハ額を「耶揄陀羅妃」の足に觸れ言ひ尽されぬ許りなる情の眼を以て猶涙に濕へる「耶揄陀羅」の顏をながめ永遠離別の暇乞を爲し恭しく祭壇をめぐるが如く三度臥床の周邊をめぐり手を胸にあて靜かに歩みながら語りて曰く我れ再び此臥床の上にありて眠ることなからんと離別の情切にして三度出んとして三度かへり衣をもて頭を覆ひ終に幔幕をかゝげて出でゆきたまへり扨太子は深閨を出て殿裡を歩み見玉へゞ美はし女官童女等は深く眠り美花爛熳の園を通るが

如く「グンガ」「ゴタミ」は左右の室にありて睡れり太子之れを顧みて艶き友よ汝は我れを樂まし喜せし者なるが今汝等と分るゝは誠に心痛き至りなりと雖も若し我れ出離發心の願を遂げざるときは衆生の老病生死の苦を救ふことあたゞじ見よ今汝等の眠れる如く終には其の死に眠らざるを得ず見よ薔薇花ゝ美麗に咲けども其枯れ凋むときは其艶さと香氣とは何れに至り何處に在るや燈火の既に消へかゝらんとする時は何處より何如にして其炎を生せしむるや夜よ堅く閉さして皆睡れり覺すこと無く我か爲めに泣き諫め引き止むる者なからしめよ此等の者は皆我れを樂ませ喜ばせし者なれば今彼等と永遠離別せんこと其情切にして其苦み甚し凡て人間たる者は樹木の如く春は雨に温ひ霜にひたされ冬ゝ木の葉の枯落ちて再び春の來るを待つ其中にも芥に根をきり去らるゝ事もあり然れと我れ此如なるを欲せず誰れか天の生を受け來れる者ありや如何に我身は梵天の如く樂しく暮すといへ衆生の悲を如何にせん我れ之れに倣ふを欲せず然れば我れ去らん我が世を捨るは救の道を未だ知らざる光を求めん爲なれば

と大勢眠れる中を靜かに歩み出て玉ひけり星は輝き風はおもむろに吹きて太子の御衣の裾を飜かへし夜明を待ちて萎める美花は爲めに開きて香氣を放ち「ヒマラヤ」山より印度の海に至る迄震ひ動きて地下の亡靈に望を得たるかことくに動搖して皆端相を呈せり經典に言く其時音樂は四方にあり響き輝ける天軍は東や西に飛び夜をかゞやかし北や南に飛び地を喜ばしめ地居の四天王は二人つゞ王宮の門に降り金銀珠玉にて作る武器を持る靈妙の一軍は互ひに手を結びて太子

を守れりと其時太子は慈悲の目的を遂げんか爲め愛惠に充滿の眼は天を仰き唇い堅く閉して立玉へり

太子やがて厩に至り呼でチヤンナよ目を覺せカンダカを引けよとチヤンナ(馬丁の名)目を覺しうと〳〵と起き出で我が主よ今夜に限り此闇黑の路をふみ分けて何處に乘出玉ふやと太子叱して言く聲ひく〳〵語れ我今眞理を求めん爲めに出離の大願を發し此樂しき黃金の宮殿を逃れ出る其時來れるなり今迄は此中にありて我が思も籠の中に幽閉られしかゞ今は我が自由を得て衆生の爲めに眞理を求め究めんとするありと、チンンナ之を聞き嗚呼、悲哉親愛ある太子よ聖人碩學は太子の爲めに天像を卜して前言せられし事も虛空からさりしや我等は太子のスドダナの王位に即き萬乘の君と載き諸王の王となり諸領の大王として支配の許に棲息せんと待まちし甲斐もあや嗚呼計らざりき今夜のことありとは君よ今此王宮を乘り出で貴尊を棄て鉄鉢を携へ乞食となり玉ふや嗚呼、我主よ今此樂しき王宮の歡樂をすて寂しき友もなき荒莫の處に至り玉ふや太子答へて我が來るは王位を得ん爲に非ず我が目的を達せん爲あり我が得んとする國は此世の變り易き生老死の充滿てる大なる領地よりも貴し速に我が爲めに「カンダカ」を牽き來れとチヤンナいふ貴き我主よ然れは御父王の悲哀幾何か大なるを計り玉へ又今迄太子と共に樂しく喜びて幸福を受けし者の悲みと歎きを慮り玉へ若し今逃れ出玉ふあらゞあとに殘れる者どもは如何になり行かんやと、太子答てこの世に顯はるゝ愛は唯粧れ飾る外見の愛にして愛戀執着の煩惱あり然れど我れ衆生を愛せゝい我が樂よ

りも大あり故に我ゝ最愛の心願を以て衆生の爲めに我れと吾が恩愛と歡樂を絶ち王宮を逃れ出るなり速に行てカンタカ(馬名)を引き來れと

チャンナ答へて然れば我れ今行かんとて不平あから憂ひ悲みつゝ厩に至り餌草架より銀の勒と勒の鎖と胸帶と馬勒鏈を取り下し手綱をしかと結び鏈の鈎をかけカンタカを引き出せりチャンナは之れを環に繋きとめ毛を櫛りきら〳〵と輝ける白き絹の衣を懸け下鞍を置き鞍を其上にのせ絆帶をしかとしめ臀帶と叉索とを結び付て黄金の鐙を左右に垂れ其上に金の網を張り珠玉のたれたる絹の房をかけたりうくてチャンナはカンタカを太子の立玉へる王宮の門の前に導來れり其時馬は太子を見て頓に勇み立ち喜び嘶けり經文に言へり此時梵天等は肉眼を以て見る可らざる薄き翼を睡れる者の耳にあてカンタカの嘶きを聞かざらしめ凡ての者を聾の如くせりと太子はカンタカの首をとり靜かに頸を打ちて云く靜かにせよ白きカンタカよ今我れを伴ふて嘗て行きしことも無き遠方に至れ此夜我れ汝に乘り行くは眞理を求めん爲あれバあり我れ何處に至り行處に止まるや我か眞理を求め得ざる限りは知ること能はず故にカンタカよ今夜汝必死の力を出し勇悍猛烈にして百戯万刄の道を塞き如何なる壁や堀のあるとも汝を障碍する者なからん見よ我れ汝に跨りカンタカと呼ぶときは颶風の汝を追ふ如く炎の如く風の如く速に汝の主を伴ひ出せ今汝が爲せる功德は我が世の爲めに己れを棄んとせる功德を助くるあり我が發心は衆生の爲めのみあらずはてなき有情を濟度せん爲なり然れ

ば潔よく汝の主を伴ひ出せと、かくて太子はカンタカの背に跨り手綱を取るや馬は勇〳〵と歩み甲はれたる蹄は敷石の上にかゞやき勒の鈴は鳴り響けども誰れも其音を聞く者あし此時「スーダーデバス」は太子の左右に集りて赤き「モーラ」の花と地に敷き靈手を以て勒をつゝみ其音の聞ゆること勿らしめたり經文に云にへり其時既に內門に來りしとき天の「ヤクシヤス」ハ妙衣を馬の足の下にしき靜かに門を出さしめたりと、太子は三重の黃銅を以て作れる外郭の門に達せしとき百人の力を以て容易く開き得ず開けば其音日中にても二コスの遠きに聞ゆる程あれども門は靜かに自然と開かれ何の苦も無く通ることを得たり、王の撰びの守衛は門の左右にありながら死人の如く深く睡入りて劒に伏せり鎗にもたるゝあり楯に寄るあり何事をも知らざりけり之れ此時妖風「マルウワ」の野より吹き來りて太子の道を安全ならしめん爲めに守衛をして醉へるか如く睡らしめたりかくて太子は何の碍も無く門を出で玉ひにき既に夜明け頃曉の明星きへなんとし清氣玲瓏と吹きしころ太子ハ奧山深く幽谷の間に達し「アノマ」の大流波うすかに見へしとき手綱をひき馬より下りカンタカの頭に接吻いとやさしくナヤンナに語りて曰く汝か我れを此處に伴へるは我と衆生の爲めに大功德を爲せるあり汝ゥ我に忠實を盡せるは我又汝を愛せるあり然れば汝今此馬を引き歸り我か寶冠の名珠と我が王衣と寶珠の帶と此寶劒と今我がきりし髮とを携へ王に獻せよ我は再び之れを着又是等を用ゆることあし且王に我か發心の大悲願を以て世の煩惱を斷じ苦痛寂莫の間に眞理の正覺を成し得る迄決して來りまみゑる事

無き旨を以て告けよ我を思ひ我を悲み玉ふこと無きように慰めよ既に我が心願を達すれば此世は皆我ものなり我は衆生の爲め一切爲し難き苦みを忍び衆生を救ひ世を救はんとするなりやよとくいろけと て西と東に分れたり

第五編　勤苦六年行如所應

ラジャグリハの周圍には五ッの丘陵連綿としてビンバサラの青々としたる樹木多き市街に及びバイブハラの陵はレモン樹鬱蒼として繁茂しアスチーの急流はピピユラの麓を環り岑鬱たるタポワンの丘は懸崖峻絶にして下に池あり清水涓々岩間より流れ出で東南にはサイログリ巍々として聳へ東にハラトナグリの陵連れり、歩みへりたる敷石の街道を回〳〵りて紅花の原野跋莽の小路を經マンゴーヂユヅピーの樹陰を過白皚碧嵩の小厓野花の咲き亂れたる平野を經て遥ゥに進めバ峻山の麓にして山麓は遠く西に廣かり無果花樹の森は鬱蒼として四方を擁す今此處に來れるは裸足に去て頭と垂れ、いと物思はしげにしは〳〵として大悲願を發し聖所を求むる者なり

いたはしや釋迦牟尼佛は此處に坐し玉ひて日に爍れ雨に濕ひ朝夕の寒さに身を洒し愍にも爛布の黄衣を着玉ひて人々の情により時々與へられたる布施をもて日々の飢を凌ぎ乞食の如き有樣となり夜は獨り草に臥して常住の家なく山狗は巖窟の周圍に號び餓へたる虎は周邊に嘯き實に危殆の境界にして其痛苦思ひやらるゝ許りなりかくて日と無く夜となく苦行を爲し端坐靜肅としてさらに動かず坐禪觀法の境に入り肉體の感格なきゞ如し故に時々栗鼠は佛の膝の上に戯れ鶏は雛を伴ふて御足の前を歩み鳩は鉢の米を喙みたり

かく太子は午日の輝き渡り四方を照し烟霞かすゝに寺院村落に靉く頃より坐禪の境に入り玉ひて夕陽眩く田野をかすめ日はくれはて暈は煜々と虚空を照し市街村落に擊てる大鼓の音鴟鴞の鳴き聲も耳に

入れ目に觸るゝこと無く虚心平氣にして深く思惟觀法の中に包まれて莫忘想形死人に異ならざるか如く夜はふけ渡り猛獸の聲は四方にさけび其聲の恐しく憎しきこと恰も人の無明の中より發せる貪欲邪欲憤恚に似たり此時太子はうと〳〵と暫時の間寢入り玉ふ許りにて月い虚空の十分許を走り夜あけ頃に起出玉ふて丘陵の頂に立ち目を見張りて此睡れる世の有樣を望み深く衆生の事を考へめぐらして、はの〳〵と夜の明け旭日の昇らんとし地の目を覺すを見玉へり夜氣猶朦朧として地を覆へるが野鶏は時をつくりて森に鳴ける頃夜は白ふと明け渡り今迄薄暗く曇り渡れる地上には段々と黄金色を現し其光高峯の頂をうち薄紅色より紅色深紅色、紫色を爲し地のはて何處とも無く照り渡り空い青〳〵と輝き晴れ朝は朝暾に濕ひて喜ひ爽かにし

て榮光と生命の王の來れるが如し

こゝに牟尼佛は「リシ」の行作に從ひ昇り出る日輪に接し洗淨を行ひ市街に歩みいでゝの身は「リシ」の裝を爲し手に鉄鉢を携へ街衢閭巷の間を過ぎ人々の布施を受け玉へり人々は太子の容顏通常ならぬ神聖の像を視て皆走り來り呼で曰く希くは我が布施を受け玉へ我が供物を受け玉へとかく暫時にして太子の鉄鉢は充滿せり子兒を伴へる婦女は太子の通り玉へるを見るとき己れの子をして地に俯し太子の足に接吻せしめ或は額に太子の衣を戴かしむ或る者は走り歸り乳酪又は菓子を携へ太子に捧げん爲め持ち來れり又太子の容顏自然と慈悲愛憐に充ち其威德溢るゝ許りにて靜〳〵と市街を歩み玉ふを見るときは多くの童女等夢みしこゝちして夢に諸天の顯れし如く思ふばかり

にて愛敬の情に滿ち地に伏し其尊容を拜せり

太子はかく供物を受けなから黄衣を着し鐵鉢を携へ溫言衆生の布施を謝しなから道を廻りめぐりて又寂寞の地に歸り大智仙人を訪ふて種々の德道と發心成就の智慧を學び玉へり

市街を離れラトナギリの中程鬱蒼として寂寞たる幽林の巖窟の下に在て己れの肉體と精神の敵とし己れと己れの身を害し痛め苦め如何程苦むるとも苦むる者なき程に苦肉の行を爲せる者あり此輩ハヨギス、ブラムチヤリス、ピクシユス、等にして痩せ衰へ人間の境界を脫しすめる者なり、晝となく夜と無く手を天に上げ呼び號べり血は涸れうせ病に苦められ腰骨肩骨はぎく〳〵と皮と骨ばかりになり恰も樹陰に倒るゝ鷹の屍の如く其狀さま〳〵にして或る者ハ非常の剛氣を以て

久敷手を握りつめたるものと覺しく爪は擠ばれたる掌の指さきに鳥の爪の如くなり又釘をうち着たる草履をはき歩めるあり又胸額腿を燧石にて强く傷つけし者と見へ身は火に燒たゞれ荊棘刺を以て身を擽き傷つけ灰と泥とを塗り死人の纏ひし汚れたる爛布を以て腰部を裹めるあり實にあわれにして此れ必す死人を葬り燒きし所ならん屍や骨は所狹き計りに散り乱れ鳶は空に舞ひて餌を求めり此等の中に日々五百度も「リシ」の名を呼び號べる者ありて、日に燬れたる頸痞せたる肋に虻をまとひ片足はなへて蹇となりし者あり此憐れなる者等は頭は炎熱にやかれ水庖となり眼は瞳みて液充ち筋肉は縮み衰へ餓鬼の如く其狀目もあてられぬ許りなり又正午毎に地の塵芥に伏し粟粒を數へおごら一粒づゝ餓鬼の如く食へるあり又人の脈の動氣を聞くこと無らん爲め刺ある葉を以て脈をきれるあり又己れを殘害あひて目もなく舌もなく陰部をきり跛にし聾となれる者あり如此人間の煩惱と獸欲を斷滅し未來の幸福を求めん爲に苦肉の行を行へり經文に言へる如くかく苦肉の行を行ひ惡天の此世に送る苦痛よりも猶大苦痛を受け地獄の苛責も猶之れよりも容易の者として惡天を恥しめんとの考へなりと

太子此處を過き此輩を見て苦める者よ我は數月の間大悲願を發し正眞の悟覺を得ん爲めに此山間に住める者なるゞ今汝等は此處に苦肉の行を行ひ猶も此世の苦しみを益せるやと云ひ玉へり

此者苦へて經文に記せる如く人己れの身を苦め生命をも之れが爲め快よく落す者は罪業の銹は清められ靈魂は苦惱の寵を脱し高く飛び

て翼の生ぜしが如く光榮と華麗の中に入ることを得るなりと太子曰く汝空中に浮べる雲を望め其形種々の現象をなしインドラの寶坐にまとへる金繡の彩なせるが如くなれとも其雲は遙か冲なる海より昇りたるものにして再び雨となり岩間谷間地上にふり下り泥にまみれグンガに漑き再び海に流れ入り再び昇りて雲となるありかく循環し來れる者なれば苦痛を受けし者は幸福に入ると思へるや、昇れる者は再び落ち買れたる者は費さるゝか如く既に汝等地獄の苦惱の市場にあり汝苦みの血を以て天の價を拂はんとするか汝の苦惱を以て得たる者費ゆれば又苦惱の勞を以て買はざる可らざるなりと隱遁者悲み答へて又再び新に初まる者なりや我等深く此事を知らず未た之を確めたる事なし然れと夜の後に晝來り擾亂の後に安穩の來るか如く今

此惡むべき肢體を苦め魂を救はんが爲めに苦痛を受け諸天と勝負を賭せる如く猶大歡樂の境に至らん事を望めるありと太子又いひ玉ふ汝の得んとせる大快樂は數千歷劫の後消滅する者とするや若し消滅せざる者とするときは上ゥ下か他方か何れにか其生を受けざる可らざる者ありや然らは決して此生命は汝か今受くる所の者とさらに變化あるに非ずや或は諸天汝の爲めに之れを永遠無窮に隔續せる者なりやと、ヨギス答へて諸天も唯生を受けたる者のみにして大ブラムは之れを永續すべき者なりと太子の玉ふ汝等は剛氣にして正義を求むるに勵む者と見受けらるゝが何ぞや夢の如く消滅し易き儲けを得んを爲めにかく苦み惱める其賭奕の骰子を投じ正眞を求めさるや汝はゥく靈魂を清淨ならしめん爲め己れの身を嫌ひ殘害ひ苦肉の業を積み

て汝の靈魂を愛せる者ならば何ぞ安全の住居を求めざる駿馬の日暮れ前大路に在りて蹄を痛めたるか如し若し今汝此世に來り憂の中に生れあから猶汝の宿れる憂の家を害し剝ぎ殘あへバ何れの窓よりして此世の光と正道を望み何れの道を求めんとするやとョキスいはく「ラジプトラ」よ我等唯此道は歩むべき道ありと信じ如何程道路の難澁にして其石はもゆる火といへ唯死を誓ひて走れる者なり然れと猶他に正道を知り玉はゝ我を敎へ玉へ知り玉はざれはせんすべなし太子はこゝを去り歩みながらいたく悲み憂ひ熟々思ひめくらし人々等の死を恐れ惡み煩惱界にありあがら其暮しを守らず苛刻の懺悔を以て己れを苦め人の歡樂を惡める惡天を喜ばさんとし自ら燃る地獄の火を以て己れを苦め聖く狂へる者の如く苦肉の業を積んで靈魂の解脫を求めんとせる人々等の苦みを思ひ反して自からいひ玉ふ野の花よ汝の美しき顏は日に向ひいと喜ばしく香氣を放ち恭しく銀色金色紫色を以て彩どれる衣裳を着何の悲しみ憂ひも無く喜び暮して汝の中少しも汝の幸福を害する者なし耶子樹よ汝は高く空に聳へいと茂りてヒマラヤ又は遠洋より遙かに吹き來れる風を飲み嫩芽の頃より果を結ぶ時迄憂ふる事なく滿足に暮せるは如何ある秘密をもてる者なりや風ゝ汝の頭を皺して謠へるか如し彼處にとまれる鸚鵡鳩諸鳥等は喜ばしげに打囀り少しも不幸の有樣を現し又不幸を逃れんとせし者なし悲哉却て汝等を害せんとせる人間は諸物の靈長にして智慧に滿ち血を以て養はるゝ者あるにあぞてかく憂ひ己れを自ら苦しめ害せるやと

斯くて太子は此事を語り玉ひしとき山の麓を沿てあまたの足音聞こへて一群の白き山羊黑き綿羊小道を回りろ〳〵と歩みながら路草を食ひ來れり此道の傍らは清き流ありて無花果の林生ひ茂れり牧者はこれを導きながら鉤索を鳴しつゝためろう群を追ひ進ましめたり牝羊は牡羊を伴ふて群にあり中にも傷つける羊兒は其傷に惱み苦み遲れ歩めるに他の群は之をおひ越し進みけるに母羊は己れの子のかく惱めるを見愛ひもがきて子羊の後さきを圍り走れり太子之れを見玉ひ慈悲を發し跛ひたる子羊を懷き肩に乘せ語り玉ふ憐れなる母羊よ安心せよ我は汝の往く處迄此子を携へ行かんかゝる獸類にせよ其恩惠を施すは僧侶と巖窟の中に坐し世の悲みを愛ひ祈るに優れりと」

其時太子牧者に問ひ玉ふ人々は昏黑に臨んで羊を檻に驅り入るゝも

のなるに汝は何故に正午頃羊を追ひたるやと牧人答て今夜我か王は諸天を祭らんか爲め一百の山羊と一百の綿羊を屠り犧牲とし玉ふ故我之れを牽き行くありと太子然らば我も共に行かんとて子羊を荷ひながら塵ぼてりの中を牧人と共に歩み玉ふ母羊は喜びて太子の足もとに從ひ喜びの聲を發せり

既に太子の河堤に來り玉ひしとき年若き婦涙を流しながら手を擧げちかより來り伏拜みつゝ妾は子と共に此無果花樹の森に住みていと詫敷打暮し居しが君は昨日恩惠を妾に與へ玉ひし方なり妾が子森林の花盛りの中に戯れしとき毒蛇あり妾が子の腕をまきたりしが子供い何をも知らず笑ひ居たりけるに終に毒蛇は口を開き鋭き毒舌にて妾が子を刺せり悲哉その時より妾が子は色青ざめ少しも身動を爲さ

ず何の戯もせず乳をも吸こと無かりき此時人あり其子は毒にあたれる故に死おんと云へり然れども我が子を失はんとの悲しさに種々療養を盡し蘇生せしめんと醫藥を求めたり其蛇の刺せし傷口は少さくして其害は思ふ程の事なく容易ならんと思へり此時人あり妾に告て曰く彼の岡に聖き人住めり見よ其人は黄衣を着し彼所を通り玉へば彼の「リシ」に願ひ汝の子の救はるゝを求めよと故に妾梵天の如き額を持ち玉へる君を見つけ妾が子の顔覆を取り何か容易に醫しうべき術を與へ玉はん事を願しか其時君は妾が願ひを棄て玉はず愛しみの目を以ておがめ御手を以て觸れ顔布を引きつゝ妾に語り玉ふは婦よ汝、汝の子の醫されん事を求めば最初汝自らを醫し其子に及はすへし然れは醫さんとする者を求めゞ之に備へられたる醫する者を見出さざる可らず故に我汝に告けん汝戸毎に父や母や子や僕婢の死人を出せし事なき家に至り其處にある芥粒を請へ然らば汝大ひに益するとあらんと君は妾に告け玉へりと太子大悲を發し笑を含みつゝ親愛なるキサゴタミよ汝は其芥粒を尋ね得しやと婦答て妾御言に從ひはや冷たる妾の子を懷にし家毎に回りて妾に芥粒を一つづゝ與へ玉へと乞へり貧しき者は貧しき者に憐をかけ皆芥粒を我れに與へり然れと妾其時尋ねて其家の親戚縁者知人又は其家に於て夫妻兒子又は僕婢の死せし事なきやと問ひしとき汝は何を聞けるや死人は多くして生る者は少しと故に妾は其芥粒を返し謝し去り又他の家に至り聞きしに此處は芥粒あれと僕婢を失へりと又他に至りしとき主人を失へる處あり芥種を蒔きて収穫ぜき迄に死せし者ありて一粒として死人

の無き家はあかりき妾がかく戸毎〳〵を廻りて芥粒を求めたれども皆死人ありて一ッとして望を達せし事なし故に乳をも吸ひ笑顔をも作らざる妾が子を彼の泉の傍に置き今君の膝もとに來り御顔を拜し此芥粒の何處より得妾が子の死せざるが如きこと無き樣にひたすら願ふ所にて實に死程恐ろしきものはあし願くは妾等を助け玉へといふ太子いひ玉ふ婦よ我ゝ汝に與へし人々の未た見出し得ざるこの苦味バルサムを見出し得たり昨日汝、汝の親愛なる子を失ひ歎き悲みしが今日は汝世間の人々も汝と共に同じ悲を蒙り悲の中にありて汝一人あらざるを知れり故に汝世間人々の悲み歎きを思ひ量れば大ひに明らむる事あらん今若し汝か悲める涙と苦〻の咒の道を止め得ば我は我ゝ血を流し如何程にも力を盡さん見よ今此羊の群は犧牲の爲めに率かれ行き人々の自由とあるものあり我れ今此妙理を究めんと欲す汝行て其子を葬れよと

かくて日は西に傾き昏黑時も近きければ太子は牧者と共に市街を過き守衛のあらひたてる王城の門を通れり太子の子羊を肩にし通り玉ひしを見しとき其尊威に驚き守衛は顧み商人は貨車を止め、商賣の取引を爲し戰爭の風聞を爲せる者は止めて太子の顏を見鍛工は槌を上げて打ッ事を忘れ織工は筬を離れ書記は書き物を忘れ兩替する者は算用を誤り米を煮る者は唯茫然としてしばし白牛の爲めに食へれ乳を搾る者はうつ〳〵になりて太子をながめ乳の器より溢れ出るを知らざりけり、婦女等は戸外に集り口〳〵に互ひに語りて今彼の犧牲を荷來れる人の尊威と美はしさは何人ある故かくありや彼の身分は何な

りや眼の温かにして其愛らしさサクラかデバラジャあるゝ、他の者いふ彼は彼の山間にある「リシ」と共に住める聖人なりと然ど太子は觀法に餘念なく少しも人々の評判を耳にもいれず考へ玉ひつゝ嗚呼悲ひかな我が悲は牧者といへる者もおく導く者もおく暗夜に吟行て此犧牲に行かんとせる羊群の如く死の刃にかゝらんとせる者なりと

人あり王に告げて曰く陛下犧牲の爲に命し玉ひし群羊を荷ひたる聖き隱士今此處に入り來れりと此時王は祀祭の室にあり、白き衣を着たるブラマンの僧は王の左右に坐し讃歌を謠ひて祭壇の中央に燃る火に薪をくべ居れり火炎焰々として薪薫物香料ッマの液にもへ移りィンドラの喜びをあせり、薪の周邊には犧牲の爲めに溉げれたる血は煙と炎の中を流れり此祭壇の上に一匹の斑紋ある山羊あり長き角はムレシャの草にしばられ僧侶は手に鋭き刃を携へ今や其咽喉を刺んとし唱へて曰く「ビンバシャラ」の王位に臨み來れる無數の惡魔よ芬々と薫れる炎の中に炙れる肉の臭をかぎて喜べ王の罪業は今我か刺んとし今やかんとせる山羊に蒙るべしと其時太子靜かに語り玉ふ王よ今彼れをして刺すことを止めしめよと山羊を傳れる繩をゆるめたりされど皆尊威を恐れ一人として此れを止むる者なしかくて太子は之れを止め凡ろ物の生命は貴重あるものにて之れを取る事いと易しといへ誰れも生命を與へ又受くる事能はず凡て己の生命を愛し之れを保たん事を勵み互ひに貴み重ずるは賤しき禽獸にても皆同じき故に其生命の貴重なるを知る時は世は弱き者に對し慈愛を發し强き者には其心をして益々貴くならしむる事又群羊獸畜の爲めに悲痛の語を以

て慈悲を說き慈悲を得んとして人々の祈願せる諸天は却て無悲慈に
して生命は環の如く相關係せる者にて今殺されんとする者は殺す者
の爲めに乳酪や毛を與へ之れに親み從へり經文を引きて鳥や獸とい
へ炎にやられ死すとはいへ因果の法により人間に生れ出る者あり今
此犧牲を以て罪業を滅せんとせる者は新なる罪業を作るか如し故に
血を以て己れの靈魂を洗ひ血をもて諸天を喜ばさんとし供物を捧げ
賭を爲し罪無き獸を殺し之れが報ひを得んとするとも善には善果あ
り惡には惡果ありて惡を爲せる者には惡の報あり善を爲せる者にハ
善の報あり凡て行、語、思の動作は盡く此宇宙の法により從ひ循れる者
にて未來の結果は盡く過去の因ありと慈愛と正眞の大悲願を以て種
々の法理を說き玉へば僧侶は耻ぢて上衣を以て血に染りたる己れの

手を匿し王は恭しく太子を拜せり太子猶語を續き玉ひ若し地上の諸
物盡く互ひに愛情をたもち互ひの食に安じ少しも血を流す事無きと
きは如何に此世は樂しからん穀物は豐年にて水ハ清く充分の食料を
與へんと此事を聞し者は佛の尊威と温柔に服從し僧は壇上の火を消
し犧牲に用ゆる及物は盡く取り去られたりかくて次の日に王は布告
を出し其命令を石や柱に刻み書かしめたり其文に曰く犧牲の爲めに
屠殺を行ひしが今之を廢し以後殺生を爲し肉類を食す可らずと故に
此日より平安普く滿ちて鳥獸及び凡てグンガの河流に沿ひ住める者
は盡く佛の大慈悲の敎に薰陶せられたり
佛は慈悲の心深くして此愛ひと喜びの衡の下にかゝれる生命をもて
る者を憐み多くの大功德を爲し玉ふ經文に曰く往昔佛ブラマン僧の

化身とおりダリッドの村にてムンダと名けたる巖窟に住めり偶大旱天下に普く穀物は芽を出さゞる中にかれ林間の池沼は乾き草木ゝ病み枯れ諸動物は何處ともなく離散せり其時巖上に牝虎の飢餓に迫り伏し倒るゝあり餲ける舌を腭と皺める頰の間より垂れ皮は皺だち肋骨は顯れ恰も垂木の雨に腐たる葺屋根の間より顯れ出るが如く二頭の虎兒は涸れたる乳頭によりかゝり舐吸けれども乳ゝ涸れて出ることなく母虎は悲み求むる兒虎を嘗出ざる乳を與へ其愛情目もあてられぬ許りなり母虎は唯悲み號びて頭を砂の中に伏せり佛此窘迫の有樣を見大慈悲を發し己れを思はず考へ玉ひけるに此森に窘困る虎を助くるは唯一の仕方あり此虎の甚敢飢餓に迫りたる事今夕にも死せんとする許りにて誰れも之れを助くる者なし然れど我れ究竟の術を以て我か身を彼に與へ食はしめんと靜かに法衣と頭巾を脱し小森の間より出で母虎よ今汝の食ふべき食は此處にありと言ひ玉ふや否や今死せんとせる虎は烈しき號びを爲し飛ゝり地に攫き倒せり今虎に與へし身は鉤の如く曲れる銳き爪にかきさかれ母子其血を嘗め已に死せんとせる虎の呼吸は己れの身を與へし者の呼吸と混せりかく佛は慈愛の爲めに己れを犧牲とせられし事ありて其功德此犧牲の祭を止めし許りに非す佛の大慈悲を感せるピンビザラの王は今佛の身の上話しと大悲願を發し玉へる事を聞き益々感じて此王宮に止めんと屢々請て曰く、なさけおや尊き御身を以てかく艱難を受け玉ひ王爵を持ち玉ふ手を以て食を乞ひ歩き玉ふは誠にいたはしき事なれば願くゝ王宮に止まり我が位に即き我か娘を娶り玉へと願へり然れども

太子は更に動く景色なく確乎としての玉はく王よ我れ今迄富貴榮華に滿ち暮らせしか今我が求むる所の眞正を求めん爲め己れを棄てたることあれば如何あるサクラの王宮や梵天の如き美を以て我れを誘はんとするとも我が決念確乎として動かす能はず我はガヤより幽林に入り我か大法の國を建んと思へば我か望達せざるの理なからん昔より多くの「リシ」來り「シャスター」は出で又苦肉の行ひをなし大法を求むる者あれとも一として達し得ず然れと必ず一大正眞の大法ありて其光明を得ることあらん故に我れ求めば又來りて相謁ことあらんと

ビンバザラ王は之れを聞き三度立ちて太子を拜し分れたり

うくて太子はウラビルバに至り玉へり此時太子の修行穿鑿は六ケ年餘に至り容顏肢體痩せ衰へ御すがたい實に痛はしき有樣に至れとも少しも滿足し玉う事なし、アラ、、ウドラ及び他の五仙等太子に語りて曰く聖き「シャスター」に書ける如く如何に修行を積み大仙人とあるとも「スルチー」及び「スミルチー」の外に達する事能はず如何にして人間たる者はジャナカント(禪)智慧より猶大智に達する事を得んや即ち其言にブラムは形體なく動作なく無情靜寂無性無變清淨思惟歡樂を有せる者あり又如何なる者といへ「カルマカンド」の修業より越ることを得んや「カルマカンド」を修する者は煩惱を脫し動作を離れ己れを去り圓滿にして天神の如く宇宙と合一に歸し偽より眞に歸し爭鬪を斷ち永遠の平安に歸し永遠空寂に住める者にして猶之れより高所に達するを得ずと太子之れを聞き玉へとも未だ滿足のありさまなく猶修業を積み玉へり

第六編　菩提樹下大覺成道

夜明(あけ)て廣野(ひろの)の園より北西に至りグンガの谷に沿ひ陵に登り見渡せばニラジヤンとセハナの二流はマヒヤ樹サンダーパーの小森の間を流れガヤ及びバラバーの岡の麓を圍りファルグに至り合し荒野や荊莉の間を流れ其岸には古昔ウルウエラーと名けたる丘陵連綿として幷ひ蒼林鬱樹綠蓐の如くそよ〳〵と風に動き空に青き波打(うつ)思ひあり麓に流るゝ水中には青白の蓮花咲き亂れ魚龜の游泳せるありて此處に隣れる村落をセナニーと名け質朴の住居相連り椰子蘆葦の葉を以て家根を葺(ふき)人々誠實にして日毎の業を營み居れり

此幽林中にありて太子は觀法坐禪の境に入り衆生の憂苦、運命の道、經文の理、因果、輪回の事及び衆生、生命の何れより來り何れに歸るやの妙

理蘊奥及び此生命は空に浮べる虹の如く他の一方は地や海の蒸氣の爲めに朦朧とし他の一方は青紅綠の美麗の現象を爲し終に虛無に歸するか如きを考へ究めんとし玉ひつゝ日毎〳〵に森の中に坐し只管觀法の念深く食事の時を忘れ正午を過し玉ふ事ありて鉄鉢の空しき事屢〻にて猿や鸚鵡のゆすり落せる樹の果を食ひ玉ふ許りにて日毎の食をも得玉ふ事少なく心思を苦め玉ふ事唯ならず御身体は痩せ衰へ佛を表せる三十二相も消へ失せんとする有樣にて今迄王宮に榮華と奢侈に居玉ひし御身もいたはしやかくあり玉ひて花の粧ひ枯れはてゝサール樹の葉の散り落て御膝下に枯れ萎か如し

一日太子深く觀法座禪の境に入り玉ひしにや心思疲れ死人の如く呼吸斷へ血の循環止まり少しも動らざる樣にあり玉ひしか一牧童此處を通りかゝり其体いさゝかも病無く目を閉ち唇を結び死せし如く日光にさらされ玉ふを見て牧童は果樹の枝を折り編て太子の頭を蔽ひ山羊より搾れる乳を太子の唇に漑きさゝから賤き身分を以て貴人の體に觸るゝことなき樣にせり經文に所謂其時ジャンブー樹の枝は頓かに葉と花を生じ互ひに編重なりて帝王の出獵せるとき珠玉金銀を以て飾れる天幕を張るか如く太子の頭の上を蔽ふへりと此樣を見牧童は大子を天神なりと思ひ拜伏せしが暫時にして太子蘇生し玉ひて牧童を見器にもれる乳を與へん事を求め玉へり牧童恐れ答へて我は「スドラ」とて鄙賤の者にて尊き君に觸るゝも恐れ多しと太子の玉はく恐るゝ勿れ惠みと施しゝ凡て衆生を親しからしむるものなり總身に流るゝ脈の血は紅にしてはす涙も貴賤何の差別あらん殊に人は額

にチルカの記識を以て生れ頸に聖きすぢを以て生るゝに非ず善と爲せる者は善に生れ惡を爲せる者は惡に生るゝ者にて何ぞ貴賤の別あらん我が兄弟よ我に乳と與へ飲ましめよ我れ大覺を得ば汝衆生の爲めに大功德なりと牧童之れを聞き歡喜乳を捧げたり

ある日花やかに飾れる「インドラ」寺院の歌舞妓囃子手と共に太子のおはせる森の傍を通れり一人の囃子手は雉の羽を以て飾れる太鼓を携へ一人は「バンスリ」の笛を吹き一人は三弦琴を彈じ靜ず〳〵と小路畔道を歩み巡りて祭典に出で行かんとせり足に纏へる鈴の響や腕や手腕にはめたる飾は音樂の聲を發し歩む毎に調子を出せり三弦琴をもてる者彈じ囃せしとき一人の妓謠ひ出せる詞に

琴のしらべの節もよく響けるうちに踊るらん、高さ低さも程〳〵に彈やひけ〳〵琴の曲、踊りはやして面白く人の心を踊らせん、かゝれる弦の強けれは弦はちきれて音歌ん、懸れる弦の緩ければ啞とばかりに音絶へん、高さ低きも程〳〵に彈やひけ〳〵琴の曲、

かく謠ひ笛ふきならし囃したて蝶の如く裝ひて森の小路を過りつゝさらに佛の無果花樹の下に坐禪觀法し玉ふを知らざりき佛は其時頭をあげ其妓の過き行けるを見玉ひて愚者も猶善言を發することあり今其音樂の調子につれ謠ひし如く我は餘り生命の糸をば強く張りしならん我か眼くらくなりて却て愚人に敎へらるゝあり我が氣力は拔けはてゝ我が求めんとする生命のたねも盡きゝて死せんとする許なりと

川流に沿ひ許多の土地を持ち多くの群羊を牧ひいと富有に暮せる慈

善深き村長あり其名をセナコーと呼ひ村の名も之れに因りて同じくセナコーと名けたり其妻をシュジャタといひ風姿質朴、温和、從順、愛嬌ありて婦女の珠玉とも云ふべき者にて夫婦いと睦敷何不足なく數年の間暮しけるが一人の子もゆらざりしを夫婦悲み「ルクシミ」に祈願をこめ「リンガム」を廻り幾度とおく米又は「ジャスミン」の花環香油の供物を携へ夜毎に參詣し一子を得んことを願へり又シュジャタは森の神にも信心をこめ其樹の下に種々清淨佳良なる供物を金の器に入れ供へたりけるがデバス等は之れを嘗食はんとせし程なり扨て其功德や顯れたりけん玉の如き一子を生み今既に生れて三ヶ月に及へり、シュジャタは神に謝せんとて其子を深紅色の肩かけに包み懷に擁き左かと押へ片手にて頭に戴せたる供物の器ををさへ歩めりラシャは先に林中に至り樹下を掃除し花環を樹幹に結び居たりしがシュジャタが來れるを見て私語けるは彼處に林神出顯ましまして端坐し手を膝の上に組み玉へり其額の周圍には光明を放ち其溫和なる容顏見るも美はしく實に我等の今此處に邂逅しは幸福の至ありと、シュジャタは佛のかく在せるを見天神の出顯せるなりと思ひ恐る〳〵近づき地に拜伏し聖く大慈悲深き林神よ此賤婦の願を聞き玉ひて今尊前に近くことを許し此象牙の如く白き乳酪と供物を受け玉へといひつゝ黃金の器に乳酪を注き入れ清淨の薔薇より搾れる香油を漑き佛の手の上に置けり佛は之れと書して一言も出し玉はずシュジスタはいと恭敬傍らにありけるが暫時の内に其食物の功德によりけん佛の容貌頓に變じ夜の觀法壹の斷食も夢の覺めたる如く精神氣力頓に復し身體健康

になり翼を得たる如く恰も鳥の砂漠の間にありて疲れはてたる者が清泉を得餓を止め翼を洗ひ清めし思あらしめたり、ジュジャタは佛の御すがた益々美しく輝けるを見靜かに尋ねて御身は天神に在ましか供物を受け玉ひしやと佛問ひ玉ふ、汝の今我れに與へし供物は何物なりやと、ジュジャタ答へて妾一百の新に子を產し牝牛の乳をしぼり之れを以て五十の白き牝牛に與へ其乳をしぼりとり又之れを二十五の牝牛に與へ之れより得たる乳を十二に與へ又十二より得たる乳を撰拔たる六匹に與へ飲しめし乳より搾りたる乳にして之れを銀の器に入れ白檀樹と香料をもてたき新たに開墾せし田地に生せし稻の眞珠の如くなる米を一粒づゝ撰集めたるものを入れ煮たる者にて妾か一心の祈願を以て一子を設たる幸福と喜びを得たる報の爲めに捧げしものなりと佛之れを聞き靜かに手を伸べ深紅の肩かけをとり子の頭に衆生を化度せんとし玉へる両手をあて玉ひ汝の幸福は永久、煩惱界の苦みを受くる事少おからん、汝は我か王宮の榮華を離れ夜と無く晝とおく此六年の間苦行して晴夜にさまよへる衆生を救ん爲めに一大光明の正覺を得んとする我れを助けたり、我は神天にも非れども我か大覺を得し後は之れより勝れる者おらん善女よ今我か身体は疲れ衰へたりしが世は幾度となく清め淨めたる食物を我に與へ我れを回復せしめたるは恰も人の生命も清め淨められ罪業を洗ひ去り無量の幸福を受けしゞ如し汝は此煩惱界に於て幸福に滿足し汝の暮しと愛は充分に幸福を得たる者と思へるやとジュジャター答て妾か心いと小さく恩を感ずるの心深く恰も野を濕せる雨の滴の百合花にたまり

し如く妾、夫の惠みと妾が子の笑顔を見家内を樂しく成せるは妾が無上の幸福にて日毎〳〵の營を以て樂とし夜明けて眼さむるや諸天を拜み供物を捧げ「ツルシー」の葉をろなへ、下婢には夫れ〴〵と仕事を命け日長て後夫を慰め歌を謠ひ暑氣をさけんため扇ぎて涼しく樂しませ夕には食事の仕度を爲し菓子を作り夫に給仕し既に日のくれ睡りに入らんとせるときは、よもやまの參詣話しや知友の話しを爲し樂めるおれば其樂み充ち滿たるか其上にも此愛らしき子を設けたるなれば死すとも「スワルガ」に導かれんと思へり經文にも敎へたる如く人、旅人の爲めに樹を植へ影を作り衆生の爲めに井を穿り子を設けたるときは死後幸福ならんと妾いと不敏か者にてかく言もはづかしおがら經典の語や、歌を聞き德行と安穩の道を聞き覺へたり故に妾思へらく善を爲す者には善果あり惡を爲す者には惡果ありて何れの處何れの時にても善き果は善き樹に生じ惡き果は惡き樹に結ぶが如く憎惡は怨恨を生じ親實は朋友を益し忍耐は平安を來すを以て善行を積み死せば必ず善果を得るおらん恰も一粒の米より稻を生じ多くの米を生ぜるが如く、もとは唯一粒の中に包み藏されしなり妾は、妾に悲みの一度來るありて非常の忍耐を爲べき時あるを知れと、若し妾が愛子を失はゞ共に悲み死せん許りにて妾が夫を地下に待たんと思へりこれ生死は何れの世何れの處にも來れる者にて喜び暮し唯其ときを待てるあり經文にも婦若し如此心情を以て死するとき夫の愛情髮に織らるゝが如く終に共に「スワルガ」に來らんと云へり、故に妾が心絶へず喜び樂み詮方おく衆生の憂苦を諸天の惠に任しながら勵て善行に心を盡

し大法に從ひ未來の幸福を求めんと欲すと佛答て汝い婦人あれとも其德義をとき玉ゆるは世の智慧をもてる者に優れり汝能く其安穩と正實を盡せ今汝の正實の花は大法蘊奥の大光を蔽いんとするには弱けれと小光を蔽ふに足れば汝の後世は榮光を得るに至らん汝が我れを拜せし如く我れ汝の心操を愛し汝を拜せん汝は鳩の己れが巢を慕ひ歸り來るの天性を受けたる如く汝の天性生れながら正實の道を學び得たり我れ汝を見て益々因果輪回の人々己れより招くを知れり我れ汝の幸福を祈る我れ汝の祈願を遂げし如く我れ又大悲願を達せんとするは汝が今天神なりと拜める我れ我か望みありとシュッシャタは己れの子を懷きあがら恭しく佛を崇め大悲願を遂げ玉はんと近きにあらんとて分れたり

佛は此清淨の食物により此時より心思氣力頓に回復し此處を去り菩提樹の下に坐し(此樹今猶殘り枯るゝ事なく世界の奇觀とあれり)茂れる葉の下に於て眞理の正覺を得玉ふ佛は其正覺の期至れるを知り尊威莊嚴一歩〳〵を歩みて智慧大覺を發するの樹下に至れり嗚呼世よ呼べ今や牟尼佛の大悲願を達し正覺に入るのとき來れり

佛は大樹の下に來り廣〳〵としたる陰の中に坐し玉ふとき枝は垂れて脩道院を設けるが如く綠葉は鬱陰として穹窿をなし地は有情の如く拜崇して瑞草奇花左右に生じ森の樹い枝を垂れて陰を作り河は動きて涼しき風を起し薰風香氣を帶び蓊勃として來り幽林に住める豹猫猪鹿は安隱に感じ小森岩間より佛の大慈悲の顏をながめ斑紋ある毒蛇は蟠り頭をふりて佛と崇め紅白綠黃の蝶は左右に飛び扇げるが

如く鳶は空中に舞て餌を落し號び線栗鼠は枝より枝に渡りて太子の周圍を走り小鳥は巣より出でゝ囀り蜥蜴は走りコイルは謠ひ囀り鳩は左右に群り如何ある個匈蟲といへ皆盡く佛の大覺に入り玉ふを知り喜びを表せり其時地は聲を發し空氣之れに響き謠へるを聞けり主よ友よ憂者救主憤恚驕傲は服しつゝ煩腦疑惑は從ひて萬物皆汝に與へられたり、悲める世は汝の世の憂苦を救へるを喜び祝せう、尊むべき哉勵みて汝の大覺に入れ尊むべき王よ勝利者よ時は來れり此夜てそ久しく待ちし時の來れるなりと既に佛のかく樹下に坐し玉ひし時日は暮れはてたり

其時暗夜の王なるマラは佛れ正覺に入り衆生を濟度し正眞を見出し玉ふことを知り大ひに恐れ充分の惡威惡術を盡し之れを沮み害せん事を企てたり故にアラチー、トリシャナ、ラガ等は魔鬼の一隊を將ひ來り智慧と正眞の光明と戰ひたり此等は煩惱、情慾、無明、貪慾、凶惡、姦邪に滿てる者にて其法如何なりしや知る由なしと雖ども佛を憎み大願を奪はんとしつゝ見る〳〵虛空暗黑となり大風を起し陰雲四方にむらゞり電光嘩々として鋸齒の鎗は四方より飛び來れるあり或い美しき巫女の美貌を現し種々姦計をたくみ温言を呈し淫歌を謠ひ蠱惑せんとし或は大王たらしめんとて榮華奢侈を示して煽惑せんとし或は種々忘想疑惑心を起し正眞の大覺を烏有ならしめんとし佛に向ひ內部外部の攻擊を試みたれと少しも動じ玉はず端坐莊嚴に在しませり經文此時の有樣を左の如く記せり

マラの魔軍にて十惡の一ある巨魁アタバタとて我欲の魔鬼出で來れ

り是れ宇宙を皆己れの者とし鏡中に己れの顔の寫れるが如き思ひをあして唯我れとのみ號びて世が我れと言へる時は皆盡し殺さんとせる程の我欲に滿てる者なるが此者佛に來りて汝若し佛となるならば汝一人にて足れり汝衆生を誘導濟度すること無く暗黒の中に漂はさしめよ汝自ら無變の地に達し得ば之れに滿足し虛心悠々不變の諸天にならひ其中に入れと佛答玉ふ汝は自らを正義ありとせる鄙劣の者にて却て己れを欺ける者ありと其時疑惑を以て罪業を作らるしむる者ある疑惑の魔鬼來り佛の耳邊に近きて萬の物は唯影の如く榮華の有樣も虛空の如し汝は影に居りて影を追へるが如し然れば起て此處を去るべしと佛答へて欺ける哉ビシキチヤよ我れ汝に關係なし汝は衆生を欺くの大敵なりと其次に來りし者はシラツパットパラマサと

て巫女の魔鬼來れり是れ人間に種々の詭計を以て祈禱又は儀式を設けしめ僞りの道義を說き地獄と天上とを開閉するの鑰を持てる者あるが此の所に來りて汝は我等が信せる經文を廢し諸天を倒し諸王の遵ひ守れる道と僧侶を供養するの法義を滅せんとするやと佛答て汝の語る處は唯其虛粧のみにして正眞は其中に在らず欺ける者よ汝は汝の暗黒に入れと次に來りし者は蠱惑の猛烈强大なる魔鬼にて情慾の巨魁なるカヤと名け諸天を支配し愛戀の王、快樂の主理ありかくて菩提樹の傍に來り莞爾と笑を含み媚を呈し美麗の花環を以て飾れる金の器を持ち五に分れたる火炎の鋭き尖をもてる箭を携へ若し其さきに觸るゝ者あれば毒蛇に刺さゝるゝよりも激しく恐ろしき者なり此魔王の左右に靈妙の音樂を奏し甘言と媚諛の眼を以て天を欺く許

りある美麗の魔女顯はれたり其太子を誘ひ惑さんとして奏せる妙音い優美にして其妙なること夜は恍惚として聞んと止まり星月は美音に感じ運行を止むる許なり況んや煩惱界の衆生、華美、艶麗に迷ひ易き者にして之れを聞らばいかばかりの感を起すならん其時謠へるか如くいひけるは如何ある者とても妙へなる愛戀の容姿の窈窕婉美ある に優る者ならん其情の動きはださるゝは語らすして言ふか如し是れ無上の快樂にて人間の天上に生るゝが如し造れるものよ、物の主よ幾多の悲も之れが爲めには慰め得ん是ぞ無上の快樂なり玉の樣ある腕に懷かれ濃き情けの接吻に遇へば如何なる憂世も熔け蕩けんと謠ひあゞら風に靡へる柳の如く軟かく細き手を動し媚を含み情を作れる情の眼は如何なる鐵石心をも蕩かす許りある顏を作り軟き四肢を動かせる振舞は恰も蕾の咲き初し美るはしさにて夜刄の如き內心は何處にあるかと思ふばかりあり此魔女は段々と踊り來りて太子の坐れる樹下に近けり其樣見れば實に美敷してたとへんようなしやかて佛に語りて曰く悉達太君よ妾は君の思の儘に從ふ者ならば妾が口を味ひて血氣の樂みを盡されよと然れば太子默然として少しも答へ玉はさればカマ大ひに怒り妖鉢を動かせは忽ち舞妓の一隊顯れ中にいと美麗に粧ひたる妙へある美女出て來れり其容ヤスダラに露はゞも異るてとなく其艶美情の目には涙を含み歎くばかりに兩手を打ひろげ音樂の如く悲しき聲を出して嗚呼君よ妾ゝ御身の傍に在らざれば死せん許りありなゞでかく苦行を爲し玉ひ樂殿のロヒニーに在せし如き樂を感じ玉ふことありや妾ゝ此長の年月御身か爲めに泣き悲めり

悉達太君よ今歸られよ妾は御胸に懷かれて妾が唇に觸れ玉へは先きの悲歎も皆消失せて夢の如くなるあらん嗚呼君よ妾を愛し玉はざるやと佛答へて汝はかく形をかり粧ひ我れを惑はさんとす其媚と美しさは皆僞れる影にして唯空漠の如し我れ汝を咒ふは汝の美貌を咒へるのみならず皆此世の粧は汝の如き者にして僞り飾れる者あり然れば今汝虛空に歸せよと言ひ玉へい林中陰々と響きて唯火炎の飛ぶが如く薄煙りとなりて消へ失せたり最後に來れる者は十魔王の巨魁ともいへる者にて大魔のパチガと呼はるゝ憎惡の魔女なるが此者の來りし時大風吹き陰聲響き渡りて四方暗黑たり毒蛇は魔女の腰の周圍に卷きつきて乳頭より出る毒乳を飲み惡聲を響き出して魔女の罵り怒れる聲と和せり佛は唯堪然として少しも動き玉はず澄然たる佛の眼を見恐縮して啞の如くあり毒蛇は恐れ毒牙を噤せり之れに次ぎ來る者は貪慾の魔女とて感觸の慾を恣にし煩惱邪慾に滿てる者なり其次は虛譽の邪慾を貪れるアリユプラガと名くる邪道詭言を以て蠱惑し戰亂苦役の危術を行へる者なり又次に傲慢の邪慾に滿てるマノと名くる魔女及びウドバッチヤと名くる僞善の魔鬼其他無明凶惡及びアビヂヤ等の物凄許りなる魔女蛙の群り來る如く蝙蝠の左右に飛ぶが如く多くの妖魔佛の四方に集り來り四方陰暗昏黑とあり山々は震ひ動き大風烈しく吹て霹靂天地に轟く許りにて黑雨の中より炎の雨を降らし星は皆落ち地は震ひ裂め〳〵より炎と吐き愁聲を發し魔鬼の翼を皷するの聲響き渡りて惡魔の大王は一千の「リンボス」より魔軍を率ひ前面に儼然と立ち向ひ天地を擾亂せりと

佛は猶此時少しも感じ玉はず恬然として菩提樹下に結跏趺坐して定心鉄壁鉄門の如く御心清く湛然として動じ玉はず霊樹の葉静かに露を帶び月光玲瓏と照り輝き魔軍かかく攻め來りしとはいへ一ッも樹下に來り樹陰に入りしもの無く唯四邊に騒げる者ありき既に魔軍は逃れ去り地ハ静かに風そよ〳〵と吹き月すみて、いと清らかあり此時佛は第三觀法禪定に入りサンミヤサンブッの地位に達せり此時光明透徹して人界の視覺を離れ大通力を發し衆生一切世々の過去を貫き見渡し五百五十生餘の久遠の過去大過去の有様を見玉へり其見界恰も人あり山の頂上に立ちて人々の山を攀ぢ登るを見る如く巖岩斷崖を巡ぐり森谷間を過ぎ青々としたる沼池の邊を歩み呼吸を休め又峻岩を攀ぢすべり落んとして又登り、瀑布巖窟清泉を前に見後に望みて攀登る有様を眺むる如く衆生の生命は卑より高に登り十智大功德を得る者なるを知れり又佛衆生の生命は應報により來り新なる生活は過去に蒔きし生活の種より収獲るゝ事を見必ず因果の生ずる事ありて得たる者は失へる者を償ひ善を爲す者ハ善果を積み悪を爲せる者は悪果を生じ死は恰も貸借の決算を爲す時には一點の誤りも猶豫も無く精算を立て再生のときは其殘高を負て生るゝ如く過去の思ひと行ひは勵亀勝利したることと及び種々の記憶を未來の果につかね登記せることとなるを悟覺せり

其次中品の觀法禪定にはアビジャナの位置に達し益通力自在を得て森羅萬象宇宙の顯象及び定星恒星の内を透徹し妙視力を發し宇宙分合の秩序と變化の止むことなく海潮の絶るなく波打つ如く大空外の

無量無邊無窮の有様を見たり又一大光の主ありて靈妙の力を以て天象の内にある無數星辰を束ね周圍を回轉せしめ美妙の光輝無數の星辰より發し璨然として大環を周り又大環の周圍をめぐれる小環を廻轉せるありてカルパスよりカルパスを經て人間界の數へ量るべからざるの有様を見たり然れども太子はグンガの滴を數へ計る可らざりしを計りし程なれば一々何により增生し何により缺損し何を以て光輝を放ち何を以て消滅するやを悟れり又サクワルよりサクワル毎に深さ高より茫漠無限の間を過きて其成織せる有様や、天體や、燃る圓體やに一大法規のあるありて暗黑より光に死より生に回轉し缺けたるは滿ち創成せられさる者は創成し良きものは純良に純良よりして無上の純良に至る等自然と命令を受くる事なくして命令法制に從ひ之れを廢ます者もなく禁止する者もなくして整ひ其變らす語る可らざる其至高なる又諸天のあづかる處にして之れを創め之れを滅し之れを再成する能力は一大法規に從て支配せる實に美妙、正眞妙益にして其能力に從へる者は整ひ戻れる者は障碍を生じ、昆虫はよく其生に從て生活し鷲は血にしたたれる餌を携へて其雛に與へ露の輝き光れるも星の輝けるも少しも其常道を變せず少しも秩序を亂すことなきを見悟りて死せん爲めに生るゝ人間は此生ながらゆる間少しも人たるの常倫を亂すことなく大小の諸物に慈悲を與ゆるときは其後世善果を得ること必せるを知りかく中品禪定に於て正眞の大覺を得玉へり第四禪定の境は憂痛の大覺を得るときにて此憂痛は種々凶惡の基を爲す者にて大法を破る恰も銹濕氣の金を犯し鍛工の火にかゝるか如

きものなり佛は今此大覺の境に入るときにて之れをチユカ、サチヤと名け至尊の正眞を得る處にて人間界の陰暗を顯せる憂痛の衆生に來り如何なる動作を生ずるかを悟覺し其の生育哀滅、愛憎、痛樂動作の種々の模樣を爲して來り衆生を犯す者なれば人間生死を解脫するに非されば免る可らざる者にて未だ凡庸の衆生一人として懊惱み曇を生し歡樂憂悶の境を脫せし者無く唯マビヂヤの大智を得る者のみ此等の憂痛煩惱を脫するを得て其視通力鴻大無碍にして「ザンキヤトラ」より盡惑と生じ慣習よりして偏癖を生じ、慣習よりして勢氣を生じ「ビトンナン」よりして「ナマリユパ」を生じ之れより形体となり名目を附し衆生の知覺に種々の感觸を來す恰も鏡に寫る如く心中に達し「ベダナ」より感觸知覺の境に入りて空漠の觀樂を生じ憂痛に沈めるを悟覺するにありて自ら喜樂悲痛は欲望の母にて「トリシユナ」の心よりして大海に浮べるが如き快樂、大望、富有、賞讃、名譽、勝利、愛戀の波を飲み益深く沈溺せる者あるを悟り富貴門閥によりて膏料美味を食し美服を着奢侈驕傲ある事及び生活の辛酸、艱苦と之れより生ずる種々の罪業を看破する者なり故に生活の餬い益甚しき餬に至り止み大智、慧を得る者にて「トリシユナ」の心を脫離し其心虛粧に亂れず、確乎として動かず、求めず、惡せず觀念を以て過去より來れる災厄を忍び受け其業因の盡るを待ち「カルマ」因果の法に伏し諸事己れの行ひ思ひ及び己れを織り成せる見る可らざる時の緯と見る可らざる行ひの經とを以て織られたる己れの因果最終餘燼なく消滅するを待てる者あるゞ其過去修行の精疎により解說の境を異にすれど正覺に入りたる者にて世に欺らる

丶事なく肉の「スカンダス」より離れ此世の繋ぎ及び「ウパダナス」より斷ちきられ輪回の車にうけられず、恰も惡夢よりさめたる如く諸王より貴く喜び諸天より大にして生命の懊惱に結ばれず生もおく名く可らざる靜寂爽快にして無罪無爲、無變終に「ニルバナ」(涅槃)の大覺に入る事なるを知れり

佛既に大覺を得しとき若よと夜は白けかゝらんとし東天は曉霧を吐て夜の暗黑を消し畢星は白く銀色をなし薔薇の如く美はしき光輝之れを蔽ひ朝暾高峯や丘陵の頂きを照り渡り深紅の冠を載けるが如し花は盡く朝の清く爽なる氣に觸れ開く叢らには清光普く徹し夜の涙は喜びの朝露とあり空は錦繡の彩なせるか如く椰子樹の葉はそよそよと動きて朝を祝し金の光輝は森の空地や玉の如く流るゝ漣に映じ人は廠に在りて羚羊を起し朝か來れり〳〵と又呼で曰く子供起よ日の光を讃めよと多の鳥は喜び謠ひユィル鳥は囀りブルブルは謠ひ雛鳥は朝よ〳〵と鳴き「サンバード」(鳥名)は蜜蜂の起き出でざるさきに飛び出でゝ蜜を吸ひ鳥はなき、鸚鵡はさけび蒼鷺「ミンナ」(鳥名)は囀り家鳩は親話止むるなく凡て朝のあけ、來るを喜べり、又佛の出離大悲願を達し玉ひ其功德旭日と共に照り渡り遠きに住める者や近く住める者の家には平安普く充ち屠れる者は刃を藏め盜賊ゝ奪へる物を返し兩換者は算用を正くし、凶惡なる者は溫柔良善となり、其有樣の變せる恰も佛の光透徹して香油に浴せるが如く王ゝ戰を止め病める者は苦痛の褥にありながら笑ひ死ぜんとせる者は東天の昇り來れる朝を見て笑ひ今迄いと寂寞悪達太の臥床の上に坐りしヤスダハラ妃は喜びに滿

ちて悲を忘れ世は喜び祝いて荒野より喜びの聲を發し妙靈の「プレッ」及び「ブッ」の聲は響き「デバス」は空に號んで事終れり終れりと僧侶は市街群衆の人々の内に立ち四方を眺めて一大事の起れるありといひ又此日に當り幽林草莽の間にい安穩充ち鹿は牝虎の子を養へる所に來りて嫩芽を食し兎は鷲の巣の下に走り鷲は鋭き嘴を以て翼をろろへ、毒蛇は日あたに出でゝ毒牙を藏め蟠り翡翠い魚の游泳せる河畔に眠り紅、青碧の蝶は飛び舞へども鳥之れを追はずして囀り平安無事に打暮し牟尼佛の恩威功德人間禽獸に及び菩提樹の下に結跏禪定に入り玉ひし時光明四方に輝き大覺を得て萬天に勝を得玉ひしを崇め榮光大陽の輝けるよりも强く輝やけり

其時佛光明を放ち歡喜莊嚴にして樹下に在り大聲を發しの玉ふ

Anékajátisangsârang

Sandháwissang anibhisang

Gahakárakangawesauto

Dukkhájátâpunappunang.

Gahakárakadithgi;

Punagehang nakáhasi;

Sabhátéphásukhábhaggá.

Gahakutangwisang khitang;

Wisangkháragatangchittang;

Janhánan khayamajhagá.

我れ生命を裝戴せる我が牢獄を建築せし所以を究め求めんとして絶へず勵みて苦難の境に居れり

嗚呼今我れ汝を知れり汝、我が牢獄の假家を作れる者よ汝再び苦痛の壁をたて僞惡の家根を置き粘土の上に垂木を置くあからん壞れたる

汝の家よ汝の家根の棟い碎け盡瓦を以て蔽へり我れ無難に汝の家を
出で救ひを得たり

第七編　王宮聚洛會父王

太子の逃れ出玉ひし後スドダナ王はいと物憂き有樣に長の年月を暮
しヤソダハラ妃も年久しく喜びの色なく只逃れ出玉ひし主君の跡を
思ひ續けて寡婦の身となり玉へり人々は妃の心と王の悲みを慰めん
か爲め駱駝を率て牧畜せる者や儲けの爲めに遙〳〵と旅あせる商人
や往きもし歸りもせる使者どもに仙人または隱者の樣子を聞きカピ
ラバッの血統なる太子を求むれども何の音信も無く見棄られしや死
せられしや更に行衛は知れざりけり
「ワサンタ」の日春の景色いと美はしく「マンゴー」の花は風に動きて銀に
波うつか如く清朗かりしもヤソダハラ妃は蓮花綠草の間を流
るゝ清流に沿て坐し過越かたの樂や喜を思ひつゞけて悲みを催せり

いたはしや今迄樂みと喜びに暮し玉ひし美貌は變じ目は涙に濕ひ頰は瘠せ落ち美くしく愛らしき眉は憂の皺を含み黑々としたる鬢髮は粧ひ飾ることなく寡婦の粧を爲し寶貝珠玉も胸や身に纏ひ玉ふ事なく白き喪服を着薔薇の如き美はしくかよわき足も歩みかぬる許りにて、いとゞ物憂き有樣なり今迄愛の燈火の如く暗夜に光れる光明の如く日輪を以て夜の安穩を照らすが如き愛の眼は少しも輝くことなく唯鬱々として春の景色も目にとまらず絹帛を以て面を蔽へるか如し片手には愛情の緒を切り憂苦の境界に沈み初めし別離の遺物なる瓔珞と珠玉の帶を持ち片手には太子の片身として遺し玉ひし今年七歲なるラヒユラ皇子の手をひき歩めり皇子は何心なく喜び勇みて母の傍に寄縋り春の景色に戯れいと興に入れり

かく妃と皇子は蓮池の邊を歩みなから皇子は米を抛擲て美麗なる魚に與へ妃にいと悲しげなる目を上げて飛び行く鶴を見つゝ何處ともなく飛び行く鳥よ汝若し妾が愛せる君の何處に在せるゝを知るならば妾が爲めに妾は死なん許りにて唯君の一語を受け一度なりとも見申さんことを願へりと傳へよとかまち玉へりかゝる所に宮女の一人走り來り申ける〻は今此王宮の南門にハスチンピユルの商人にてトリピユラとブフユルッタと呼ばるゝ二人のもの金にて飾りたる珍らしき織物や璨〻と輝き波うてるか如き刄、黃銅の鉢、象牙の彫物、香料又種々の異鳥と多の寶物を携へ遙と陸のはてより來れり又其者は待にまちたるシダルッタ太子の御容子を知り太子を拜み供物を捧けし者にて太子は今至靈至尊の佛となり敬縮すべき許りにて一切衆生の爲め

に救の道を說き聞かせ大慈悲と發し玉ひ此地に旅びし來らんとし玉へる事を告げたりと此時妃の心は飛び立つ許りに動氣はげしく春の末つ頃ガンガの河に大雪の融け流れ來り波うつか如きさまにて掌を合せ喜びのあまり涙ぐみつゝ早く其商人を此處に呼び入らしめよ此長の年月九年餘も其樣子を聞かん爲め今迄飢へ渴ける如く望める者なれは若し其者事の實狀を知り具に妾に語るなら諸王も羨敬思ふ許りなる多くの珠玉と寶を與へん早く呼び來れ汝も亦其報償に預かるべしと、命し玉ふやかて商人は召に應ぜ輝き渡れる道を裸足にて多くの宮女の中を通り華麗莊嚴に眩きさまにておろ〳〵歩み樂殿に入れり既に殿中の幔幕の外に來りしとき妃は音樂の如くいと愛く溫言に商人に向ひ汝は遙〳〵と遠方より來りし者にて佛を見佛の衆生の爲めに救の道を說き今此處に來らんとし玉へるを知らば汝具に其事狀を妾に語れと問ひ玉へはトリヒユシヤは我等こそ親く佛を見奉り尊前に拜伏せし者にて其尊き事諸王にもまさりてファルギユの岸に於て遂げ玉ひし大功德により衆生の友となり衆生の王となり玉へりされは日頃の悲は變りて却て喜びとなり其說き玉ふ語ゝ衆生を慰むるか故世の惡を離れ世の悲を脫し純然正眞に光り輝き玉ひて街や巷に入り安穩に悟入するの道を說き玉ふや衆生の心之に靡きて風に散る木の葉の如く牧人に從へる羊群の如く我等も親しくチルニカの森に近きガヤに於て佛の說法を聞きたりき其敎へ玉ふこと人をして坐に敬愛の心を生せしむ必ず近き內に此處に來り玉ゝんといひけれは妃の喜び限りなく呼吸をもつかゆる許にて良友よ汝は妾に喜はしき

音信を聞かせたりされい佛の大覺を發し玉ひし一伍一什を知れるや
と問ひ玉へはフフュリユッタは一々其時谷間に住める人々の知れる如
く其夜の恐しくして妖魔出顯し天地を暗黑にし地は震ひ「マヲ」の憤怒
大水を起せし事と既に無上大覺に入り夜の明くる頃光明燦爛として
發し衆生の望み高く昇り佛は樹下にあり無上正覺に入り玉ひし事を
語れり又語り續けて佛數日苦行の後蠱惑の嵐を逃れ正眞の岸に達し
金剛道を開き佛自ら考へ玉ふて衆生は罪惡を行ひ易く貪欲に妨げら
れ數千の惡泉より流れ出る塵滓を飲煩惱の忘想及び欲樂に執着して
之れに厭離の心想無く如何にして十二「ニダナス」を受け大法を悟覺す
るの救に入る事を得ん其怪む可きは籠禽幽閉の戸を開かると雖ども
猶出る事を欲せざるか如き事ありとしめし玉へり然れば我等今佛に
歸依し大法を難しとして歩まざるときは誰一人として救を得る者あ
らざらん故に佛は大慈悲心を發し玉ひし事を察し奉るに大苦惱に入
り分娩の極痛に呻か如く"Násyami aham bhû Násyati lôka!"我確りに失へ
り我れ及び我か衆生と號び玉ひ又瞬時にして西風につれ辨ぜるが如
く"Sruyatâm dharma, Bhagwat!"嗚呼至尊よ汝の大法を說けよと聲あり
之れより佛は衆生の妄想無明を脫離し日輪の遂の池を照し渡り何れ
の蕾か開き何れの蕾か根より生ぜるかを見る如く衆生の大法を聞か
んとし聞かんと待てる者を見玉ひ聖眞の笑を含み我れ衆生の我か大
法を聽かんとせる者をして大法を學ばしめんと云ひ玉へり又曰く佛
の無上正覺を得玉ひし後山に沿ひベナルに至り此處にて如何に生死
を解脫し如何に衆生にまとへる過去の業因を離れ無上天に至るも無

間地獄の底に至るも衆生の自らおせる應報たるを敎へ五人を化度し玉ひたり是れい月の眞中頃にして「ベイシャ」の十五日目となり滿月の時なりきと又曰く其後仙人の一人にコーンヂニャと名くる者四德解脫を得て佛に歸し續てパサバ、マハナマも從へり又此處なる鹿園に於てヤサドの王及び五十四の王族は佛の說法を聞て發心悟入せり故に和樂安穩充ちて其狀恰も砂礫の地に濕を得て草や花の生せし如く人々妙智を得たりと、又曰く佛は今此六十人の佛智に入りし者に解脫出離の心想を深くし玉ひて大法を敎へしめんが爲めに所々に送り遣し佛自ら鹿園をイシバタンの南なるヤスチとビンバシャラ王の領內に至り數日止り敎へ玉ひけれはビンバシャラ王始め多くの人民盡く慈愛の道と輪回の法を學び發心歸依せり王は之れに因て佛に恩謝の贈物を捧げ佛の御手に水を灌き又巖窟幽邃泉水淸洌にしてさも仙境とも云ふべきウェリユバナと名けたる竹園を供養し王は又左の語を石に刻み建たり

Yé dharma hetuppabhawá
Yesan hatun Tathágató;
Aha Yesan cha yo nirodhó
Ewan wadi Mahá Samano.

衆生生活の行路と安樂は唯此「タゴダ」により靜寂を得るあり煩惱の憂痛を遠離せんと欲する者は佛の大法を悟覺すべしと

又佛は此竹園に於て大衆群の內に淸淨智慧大能力を以て說法し玉ひければ即坐に九百の人民盡く黃衣を着し佛に歸依せり其時佛は左の

偈を唱へ玉へり

Sabba pápassa akaranan;
Kusalassa upasampadá:
Sa chitta Parigodapanan;
Etan Budhanusásanan.

惡行は消滅せしめんとせる負債を高め、善行は遠離救助を得るあり
罪惡を摧伏し善行を修勤し我慾を攝伏せよ是れ大法の悟覺を得る
道あり

かく商人は委敷太子の事を述へければ妃大ひに喜び勞ひ多くの物を
與へ玉ひ終にのぞみ太子は何れの道より來らるゝやと尋ね玉へは商
人は此市街のはづれより六十「ヤジャス」にしてラジャグリハに至りろ

れよりソンナを經て陵に沿ひたる平易道なれば牡牛にて一日靜かに
歩みて八「コス」を來れば唯一ケ月程ならんといふ
王は之れを聞き騎馬に長たる朝廷の貴族九人を別〻に派遣し一人毎
に命するに我れ七年の永の年月不幸と悲痛の中に暮しはや消へ入ら
んとする許りにて少しも汝を尋ね求むることを止めず待ちて今に至
れり速に來り臣民の渴望をあかし我か未だ死せざるさきに對面せん
事を欲する旨を以てし又ヤッダハラ妃も九名の騎馬武者を遣しラヒ
ユラの母なる妾ゲ一度御顏を拜まん爲めに思ひ焦るゝこと月草の月
の出るを待倦が如く唯望みと思ひに打消ゆる許りにて何卒今一度妾
が爲めとラヒユラか爲めに歸り來り玉へと乞へる旨を命ぜ玉へり、や
がて釋迦種の貴族等竹園に着きし時は恰も佛の大法を說き玉へるお

りなれは佛の清淨圓滿にして慈愛威嚴を以て大法を說き聖き唇より出る悟覺の道を開き心醉へるか如く一言も發せす王と皇妃より受けたる使命を打忘れ唯思ひあぐめり彼の蜜蜂の蜜に飽けるもの霖雨に遇ひし時には美花を見て止まらざれと其狀恰も蜜蜂の巢に飛ひ歸らんとして途に芬々と風に薫れる「モグラ」の花を見るときは花蜜を吸ひはすが如く王と妃との使者は佛の語を聞て己れの使に來りしことを打忘れ一同に佛の法壇の下に止まれり因て王は更に太子の幼年の友にて今は朝廷の重臣あるウダイを迎の爲めに遣はせり、ウダイ既に太子の前に至らんとするとき佛の說法を聞うざらん爲め木の綿を取り其耳を塞ぎ法壇の前に出來り王と妃の使命を全ふせり

其時太子靜かに頭を下げ衆人の前に語り曰く我れ必ず行うん是れ我が望む所我か務あり故に人たる者此身體を生み付けし親を敬愛するの心を失はざる可らず之れにより人は生死を解脫し過去の罪業を盡し惡因を作ること無く慈愛恩敬を施せば終に涅槃の境に入る事を得ん我れ直ちに行かんとする事を父王に知らしめよと命し玉へり此事

カピラバッの府內に知らるゝや太子奉迎の爲めに種々の用意を爲し既に南門には美麗しき幕を張りつめ其柱は花環を以て飾り其絹の壁は紅綠錦繡にて彩あせり

又路には「ニーム」や「マンゴー」の香へる花の枝を飾り地には白檀樹や素馨樹を敷きつめ旗を建て連ね太子の來り玉ふ日には多くの象を備へ之に銀の鞍を置き牙のさきには金をはめ渡場の外に待たしめ太鼓を置き太子の來れるを見るときはシダルッタ君は來り玉へりと打ちなら

さしむ其時多くの迎ひの王臣い皆拜伏し舞女は左右に走りて踊り謠ひ花をまき散らし太子の乘り玉へる馬は膝深く薔薇や「バルサム」の花の中を歩むが如くならしめ市街中をして音樂を奏せしむる事とせり」此事の定められし日より人々は今ゝ今かと思ひ耳を欹て來着を號び打鳴す太鼓の音のみ聞くことを待かまへり又ヤソダハラ妃は心いらだちて興に乘り市外に出で幔幕を打張れる處に至り待ち玉へり此處はニグロダといへる所にして美麗の花園には波斯棗や種々の花木鬱蒼として繁茂し小道〳〵は花卿果樹の間をめぐり其美くしき事一層なり此並木の南小道を過きて村落の連なれる處あり下卑鄙賤の住居にして人々及びブラムの僧等は若し此のクシヤドリヤに觸る者あるときは汚穢を蒙るものとせり

斯くて此の者等も太子の來り玉ふを待かねて象のおき聲や寺院の太鼓の音を聞くときは今や太子の來り玉へるかと思ひ木に登り望めるあり或は隘路にありて太子を喜ばさんと種々の用意をおし道をはき旗を建て無花果樹の葉をあみ連ね「リンガム」を磨き耀らし前日飾れる弓形門の花を新に修補ひ道を通れる者は互に太子の來り玉へる事を噂せり妃は人々のゝく待ちかまへたる用意を見人々の風聞をきゝ太子の來り玉ふを待てり

其時妃は遙かに黄衣を着し頭の髮を新に剃ぎ隱者の如き裝をなし手には瓜の如き鐵鉢を携へ靜ゝに歩み人々の布施供養を受けおがら謝文を唱へ進みつゝ二人の法弟は黄衣を着し後に從ひ來れるを見たり太子の容貌嚴かにして威德に滿ち慈悲の眼は四邊の人をしてろゞろ

に愛敬の思を發せしめたり供物を捧げんとて來れる者は太子の尊顔を見て驚き拜伏し更に供物を得んとして家に走り己の貧しきを歎けるばかりにして多くの老若男女群集し左右後に從ひ互ひにつぶやき語り是れは何人に在すやリシは斯く見へ玉ふ者なりやと既に太子の幔幕に近く來り玉ひし時妃は幕より顯れ出で號んでシダッルタ君よとうれし涙にむせびかへりて御足の前に伏したをれ玉へり

此後いたはしや妃法門の化度を受け玉ふとき妃の人間界の情を絶ち煩惱を出離し己れの慾を斷つことを誓ひ玉ひけれは佛は法門に入る事を許し語りて宣く深き愛を斷たざれば聖所に生ずること能はず解脱の苦痛を受けざれゞ悟覺に入る能わず忍耐智慧を發して出離すべし三期の大苦行は菩提に入る事を得て此暗世を照し扶くる事を得ん

即ち第一期は決心第二は試着第三は名目あり我嘗て決心の境に在り善根を欲し智慧を求め見覺に住せし事あり久遠の以前眞珠を多く產するランカの南に當れる海岸に於て一商人となりラムと呼わしれ時ヤンダハラ我と共に我が海邊の村に住み其の愛らしさ今よりも優れる程なりし名をルクシミといへり我れいと佗敷貧乏に暮せし者なれば一ッの儲けを爲んため我れ遠く旅立てり其時ルクシミ離別を悲み海や陸の難を思ひ引き止め妾を愛し玉わゝなどて妾を今振捨て行き玉ふやと言ひし程なりし然れとも我れ陸を過ぎ海を渡り晝夜となく海の深みに入り艱難の後終に月の如くかゞやきたる眞珠を得たり其價貴ぐして王の資產を盡すとも猶足らざる程なりし我れ喜び歸りしとき我が村には大飢饉ありて我れも旅行の疲と飢渴に迫り眞珠を腰

に持ちながら最苦しみたれど一ッの食物なく喜ばさんと思ひ愛せしルクシミは亦我家の入口に倒れ飢へに迫り今や死あんとせる有様ありしかゞ我呼で曰く誰れか我ゝ爲に食物を彼れに與ふる者あらば其報ひとして月光の眞珠を與へんと其時一人あり貯へ殘せる三「シア」の穀を與へ眞珠を持ち去りし事ありルクショは是れより蘇生し君は妾を斯程までに愛し玉へりと言ひたりき是れに因て我は我が生活の樂みと慰みを得し事ありたり然れども只我が最終の儲けある大海の波より得たる純粹の眞珠は十二「ニダナス」(因緣)と正眞の大法なり此眞珠たるや消滅することなく曇ることあく益々人に與ゆる程光明と放てるものにて其の鴻大無量恰も彼處の岡なるメルの小蟻の土堆の如く無邊の大海に於て一小孵卵の跡に打入る滴の如く衆生に施す功德も之に同し故に愛は感觸の苦痛より強く大なる者にして心の弱き者には重用のものなり斯くヤッダヘラは安穩幸福の中に歩み至れるなりと

扨て父王はレッタルタ太子の頭髪を剃り乞食の着るが如き弊衣をまとひ鄙賤の者より布施を受けながら鐵鉢をさゝげ來り玉ふを見て憤然として怒り三度地を打ち銀の如き白ゝとしたる鬚を摘み恐れ慓へる王臣を從へ走り出で滿面怒を含み馬に打乘り刺輪をあて市街の中に驅け出て玉へり其急卒なる鹵簿の騎者と雖も先驅を咤する者なかりき寺院を廻り南門に出で玉ひしとき大勢群衆叢りをしあひ太子に着きまとへり太子の靜寂の容顏を見玉ひしとき今まで燃へ狂ひし憤怒もきへ失せて太子の拜伏し玉ひしと共に王の慢りの心も薄らきて膝

を地に付け玉へり王は久々の對面故其の喜しさ奈何ばかりなるや知る可らず嘸太子の靜寂威德圓滿なるを見玉ひ滿足し玉ひしならんと思はる然れども王の曰く事終れりシッタルタよ汝は爛布の弊衣を着髮を剃き草鞋をはき卑賤の者より食物を乞へるは之を目して天人師と名くる事を得んや見よ汝は此大なる王國の後嗣にして諸王の王となり地の產物及び貢獻思の儘にして汝の坐の周圍には多くの衛士をしたがふへき威儀尊榮の身に生れながらかく汝の零落せるはいかあるる有樣なりや見よ多くの兵士は整然として列を成し汝を城門外に迎へり汝は朕の歎き悲しみをも思はず此歲月きの久しき何れに漂泊せしや見よヤッダハラは寡婦の如くなり管弦奏樂の聲を聞くことなく喜悅の衣服を着けず悲み居りて今漸く錦繡の衣裳を着たるかと思へば

汝の乞食の着せる弊布を纏ひしは王姫をして乞食と配偶せしむるが如し、此れ如何なる故なりやと太子靜にこれ我が種屬の服なりと答ふ王は汝の種屬とは何んぞ此の「ハマサンマト」より廣き世界に汝の如き種族なしと詰り玉ふ太子曰く我が種族とは此人間界の種屬に非ずして無形靈妙の者とあり兒が如く佛の苦行をなし兒が如くなせる者こそ我が種屬にして即ち王には軍裝を成し玉ひ兒は隱者の裝をあすが如し其の慈愛と我慾を摧伏せる力は强國の王よりも强く兒が如く世を救ひ化度する者となれるあり然れば今大慈悲により勝ち得たる寶珠を王に捧んとて持來れりと王問て曰く其の寶珠とは何ろや

太子は王とヤッダハラ妃の手を取り群集の中を歩みあから靜寂純全に達する智慧の源なる四大正義と(四諦)と衆生の守る八戒律(八聖道)を

示し王にもせよ奴隷にもせよ四大德(四諦)八戒律(八聖道)の修行に因て法門の悟入を得老若貧富の分ち無く輪廻を轉じ涅槃に入る事を說きあがら歩みゆきていつとなく王城の内に來り玉ふかくて王は太子の語を聞き玉ひ心を洗へるが如く皺める顏ものび王自ら太子の鐵鉢を携へ玉ひヤソダハラ妃は愁の涙もきへさりて最と喜びしく其の夜は共々に安樂の道に入り玉へり

第二八編　轉法輪入涅槃

ナガラの急流コハナスの岸には青々としたる牧場遠く連り此處より西北に巡り廻りてベナレヌの堂宇に至るには牛車の旅にて五日程にて來らるゝなり此處より遠く望めばヒマラヤの峯高く聳へて雪を戴き美麗の花卉四時絶ることなく咲きろひ清き水其中に流れ蒼林攢峯の風色甚た佳にして夕陽既に春くの頃は涼風山々の木の間谷間を吹きかすめ其爽かなること一層なり既に此處も荒いて〻昔盛時の有樣は何時にか消うせ腐朽たる堂宇の間より蛇匐出て敷石の上に蟠り蜥蜴い一度王の住居とあり歩み玉ひし樣や階廊の上にはいめぐりて巣を結べるあり狐は床の下に子を養ひいと寂敷有樣なれとも唯昔とあく今とあく變らざるは峯の景色と河の流れにて昔し此處にヌトダ

ナ王の宮殿ありて金の如く輝ける夕には牟尼佛の法義を語り自ら觀法の業を積み玉ひし處うと思へば昔しを慕の心いとゞなつかしく經文に記せし如く昔し太子の說法し玉ひし其舊跡の殘れるありて淸き流れや蒼々と鬱陶敷茂れる森は四周に廣がり懷舊の情さながら其當時を思はしむる許なり

かくて牟尼佛は端坐跏結して在しける時群衆は佛の唇を開き大法を說き出し玉ふを待てり佛は王の右に坐をしめ周邊にはナンダ、デバダッタなどいへる王族重臣ありセリユット、ムガランの二大法弟ハ黃衣を着し太子の後に坐し、ヲグラ皇子は佛の膝の間に坐しにこ〳〵と笑ひ最喜ばしげに見へ今迄悲痛に打暮せしヤソダハラ妃は無上妙覺の愛を悟り生死煩惱の無明を解脫せし心地していと嬉しく佛の傍にあり御手を以て御衣に觸れおがら三世界の待ちし佛の法語を傍近く聞き玉へり

抑此時の有樣は如何に莊嚴を究めしや佛の說玉ひし御語は唯經文に記せし儘を思ひ測る許りにて詳に之を知る能はずと雖も極めて盛ありしならん扨ていと朗なる夕に佛の大法を說き玉ひ時は幾世の亡靈となく淨居天諸天等盡く集り來りて七天空くなる許りにて御座の前につどひ來り無間地獄の鑰は除れたるならん夕日は明々と高翠に止まりて大法を聞き夜は天女の嬌て見蕩れる如く靉きたる雲ハ鬢髮の如く輝やける星は眞珠寶石の冠の如く月は皎々として額の如く夜は黑くして黑衣を爲せるが如く薰風ろよ〳〵と吹き美女の香へる衣の飜かへるか如し太子ハ此内にありて敬へ玉ひしとき貴賤の別ちな

く奴隷ムルチ及び莽林に住める者やアリヤンの種族までも皆來りて大法を聞けり其時山川に住める禽獸蟲魚盡く佛の恩威大慈愛を感じ猿、虎、熊、鹿、山狗、狼其他惡食を爲せる鳶美麗なる鳩碧玉の如く輝やける孔雀醜き蠻、班紋ある蛇、蜥蜴、蝙蝠河に住める魚類に至る迄其他此等畜生より罪業少なき人間皆盡く佛の化度を受けたり佛左の大法を王と諸臣の前に示せしとき人々無上の喜悦を感せり

嗚呼アミタヤ限りある語を以て量る可らざるを計り限りある思を以て測る可ちざる深みの底に沈ます勿れ問ふ者は謬り答ふる者も謬る亦言を發する勿れ

世の經書は其教ゆる所皆黑暗ありブラムの如きも其一にして暗夜の內に觀念を凝せるなり、人界の眼を開き俗界の念を以て悟道を得

んとする勿れ煩惱界の曇の中に在りて何を求むるや其幕の內に幕ありて終に幕の開くことなからん

星は蒼穹に回轉し秩序を亂すあし人間界は生死苦樂に滿ち因果應報時の進みと共に回轉し人の潮の如く絶ゆる間なし

其狀流るゝ水の如く急あるあり緩なるあり其變するや同じくして同玄からざるが如く遙ある泉より出で流れ〳〵れて終に海に入る海に入てゝ日に蒸され再び地面丘上に落ち水となり循環やむことあし

故に天地諸の世界は幻の如く變化絶へ間無くして回轉せる爭競窘迫の車は誰れも之れをさゝへ止むる能はす

故に漫に祈願する勿れ暗夜に向て光輝を求むるとも得ず靜寂に向

ひ何をも語る能はざる者に求むる勿れ嗚呼兄弟姉妹よ神信祈禱と稱へ無益の供物を捧げ讃歌を謠ひ或は血を捧げ果物菓子を供養し汝の心思を苦しむる勿れ汝の救は汝自ら求めざる可らず人間自ら己れの牢獄を作れるあり

人間ハ至尊にして自由の權能を有する者あれば上下四周諸天の權能に於ける如く生體の權能も唯己れの行爲に因て苦樂を顯せるなり

故に己れの行爲に因て己れの因果應報を招く者なれば惡に陷るあり善に歸するあり先きの者は後になり後ある者ハ先になる其輪回の果は天の釋梵と雖ども免る可らず

過去の罪惡を以て魔鬼に墮落せる者と雖とも既に業因の消滅し凶惡の罪業の盡くる時は清淨潔白とならん

故に日々驅役せらるゝ奴隷と雖ども其善行功德を積むに因て王に生れ、今迄王の位を占め尊榮に暮せし者も其行の因果に因て墮落の境界を受けん

故にインドラの至尊の者とても皆因果に纏はるゝあれば其因によりて昆虫に陷る其極は最下に達し其極は無上に達す

輪回の車たる靈妙にして其回轉間斷なく一つの止むる者無く登れる者は落ち落ちたる者は登り其轂止まること無し

汝等此輪回の車にかゝる時は其繫げる鎖を截斷すること能ハず汝等靈妙の心は咒の身となり魂魄常に痛苦に居らざる可らず

幸ある哉汝等衆生の魂魄靈妙ある哉其心意識の能力は苦惱を感ず

るよりも強く、之れに因て善行を修し善果を求め善生に生出す

百八十八

故に我れ佛衆生一切の苦惱を愍む其心煩惱界の憂苦に窘迫せらるゝを見て悲み衆生の解脫を得るを見て喜ぶ汝等見よ汝の受くる懊惱は汝の自招くものにして他より誘引强迫したるに非ず汝をして輪回の輻を懷き之れに觸れ生死に陷らしむるも皆汝の招ける處空莫の轂涙の輪鐵も汝の知る處他之れを知るなし

見よ我れ今汝に正眞を示せり下無間界の地獄より上蒼穹外の極天及びブラハの坐より永遠無窮何れの處と雖ども眞天の能力に從ひ唯其法制に從へるなり

故に園に開ける薔薇花を見よ池に沈める蓮の葉を見よ種子より生じ地に出でゝ春の衣裳を織れるなり其彩なせる空の雲にして孔雀の頸に光れる碧色の如く星辰碁布羅列して天工を示し電光風雨之れに從て其天能を顯す

暗黑より人の心を生じ一卵よりして美麗の雉を生す其妙力たる破壞たるを完備くし舊き怒りを慈愛に歸せしむ

黃金の「サンバード」(小鳥の名)の巢には灰色の卵ありて寶珠の中に埋藏さるゝが如く六角形の蜜蜂の巢には蜜壺あり蟻は能く其道を知り白鳩も亦能く其道を知る

天工の奧妙なる鷲は翼をひろげ餌を己か住家に携へ歸るを知り狼は其子を養ひ自然と其食物を求め其友を得るの天稟を受く

宇宙のもの其生を受け其用を利し其用を盡せり母の胸より白き乳を出し毒蛇の牙よりは白液を出し刺毒を蒙らすあり

百八十九

蒼穹には無數の群星整然として其秩序を亂さず地下には黄金、碧玉寶珠の藏匿せらるゝあり

森羅萬象宇宙の物靈妙の能力を有し松柏の林には種子を生じ萌芽を出し花卉綠葉を生するあり

之れを殺し之れを助くる自由なれど宇宙法制の範圍外に脫するを得ず宇宙を織なせる者は生活と慈愛なり其機の緯は死と痛なり之れが形体を爲し之れが形体を爲さゞるも終に形体を爲せば整然美麗にして其最初生存せしよりも完くして潤澤整然其天工を顯し完美とある

凡そ今汝の目に觸るゝ物も天工にして目に觸れざる多くの物も天工なり衆生の行想思意盡く大法の制に服從せざる可らず

故に見ゆずと雖も天の誠實の手を以て汝を加護し聞かれずと雖ども風の吹くよりも强く汝に語れり慈悲愛惠は衆生をして長の憂痛を寬融にし衆生己れを顯するの基となるなり

故に汝等衆生天の權能を侮蔑する勿れ之れに逆ふ者は失ひ之に從ふ者い得陰(かくれ)たる善行は之れに報ふに幸福平安を以てし匿れたる惡業は之れに報ふに痛苦を以てす

天は何れに於ても汝を見何事によらず記せざるなき正義を行へは其報ひあり凶惡を爲せは等(ひと)しく之れが報(むく)ひあり「ダルマ」は長く汝を待てど汝達するを得ず

天の正道にい偏僻宥免なく其量る處は正眞其衡(はかり)は純正にして一点の差異おく、其時い虛無知る能はずと雖ども之を翌日計るあり數日

の後計るあり固より知る可らず

故に刄を以て人を害する者は己れを害するなり不正の裁判者は己れの正義と曲る者にして欺ける舌は己れを欺けるあり竊盜强盜は皆己れの身を奪へるあり

此大法ハ正義眞誠に動き回れる者にして決して他道に動き或は止る事なし其心は慈愛にして其目的は安穩極樂なり

故に汝等兄弟よ其教ゆる經典に從ひ守れ一切衆生今世に受くる生活は過去の業因を顯せる者にて過去の罪因は苦惱を來し過去の善因は幸福を來すなり

汝の蒔ける者は汝の收獲せる者なり彼處の野を見よ「シースマム」は「シースマム」なり稻は稻なり靜寂と暗陰は之れを知れり衆生の運命も亦之れに同じ

今來れるは己れの蒔し者を收獲(かりとらん)か爲あり「シースマム」及び稻も其蒔れたる過去より來れるあり雜草毒物の生じ來り衆生を害し地を苦ましむも其因あり

故に衆生能く勤勞に耐へ惡草を拔き去り地を清め耕し之れに純良の種子を蒔けば其生ずるや純良の收獲を得るなり

故に衆生能く己れの苦惱の何れより生ぜ來るかを知り其苦を忍び受け常に慈愛と正眞を行ひ過去の罪惡の負債を消却せざる可らず

故に人己れを守り此煩惱の血より生ずる惡慾欺僞を清め業因に服し善行功德を積めは必ず己れの罪惡を清むることを得ん

かく此世に日々住するに當て慈悲、清淨、正眞、親切、信實にして生活の

消ゆる迄此世に纏へる煩惱の忘想を摧截し既に死する時は己れの業因の負債を消却し決算を立てたる者にして罪惡は消滅脫離し善果を得何時と無く佛境現前す

故に勤行精進して得たる果は再び生活と名くる者を生ずる事なく生活の起源に歸着せし者にて人間と生れたる業果を成就せる者なり

如是勤行精進して解脫を得たる者ハ苦惱を蒙る事無く罪惡に汚染せらるゝなく人間界の苦樂を感ずるなく至靜勝上の心を攻めらるゝなく生死にゥゝる事なく終に涅槃に悟入し生活に住する無く禍慧止むことなしOM Mani Padme hom(嗚呼蓮に於ける寶珠、嗚呼)一滴の露流れて光明の大海に入る

是れ即ち因果の教義なり之れを學べ罪惡の銹既に離れ生命、白炎の如く消へゞ死も又之れと共に死せざる可らず

故に我れ有り我れ有りし我れ有るあらんと言ふ勿れ旅人一夜の宿を重ね家々に移り旅寓の好惡を記憶する如く家より家に移らんとするの思を懷く勿れ故に新なる者宇宙に生出し最終の生活を爲す恰も蠶の繭を作り其内に住するか如し

其作用實体を有する蛇の卵より出で鱗を生じ毒牙を出すか如し又蓋葦の種子岩上空地、砂間を飛浮し泥中に落ち繁殖するか如し

又如是生する者補益を爲すあり禍害を爲すあり一度慘怛たる殺戮者なる死の刺擊を蒙るときは血は未た清められざる生體の碎片を穢し風之れを追て苦惱枯凋の境に至らしむ